
俺と許嫁

シラバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と許嫁

【Nコード】

N2832N

【作者名】

シラバス

【あらすじ】

就職難の中で何とか内定を貰った俺、西城悠斗。知り合いに内定の報告をしていた際に祖母から許嫁の存在を唐突に教えられ、混乱するもせめて大学を卒業するまでという条件で許嫁である三塚由奈との奇妙な共同生活が始まった。いや、俺の家は別に金持ちとか先祖が偉かったとか全然無いから。許嫁にも色々秘密があるらしいが……。

ぎこちなくも周りの人々を巻き込み距離を縮める二人のほのぼの恋愛・コメディ・シリアスが主体なストーリー！。

始まりの内定（前書き）

読者だったのが執筆にまで手を出してしまいました。

これから精一杯頑張っていきたいと思いますので宜しくお願いします！

始まりの内定

俺は大学四年の就活生だった。

世の中はニュースでも何度か真剣に取り上げられる程の就職難だ。ここ数年で大学生の人は本当にご愁傷様としか言えない。態々このタイミングで就職難になるなんて想像もしてなかったし、実際此処まで大変だとは思わなかった。

とはいえ、俺もその一人だ。

本当に何社受けたか最早曖昧だし、何度も他県に行って辛い思いもした。理不尽な面接対応や厳しい筆記試験、やる気はあるのに認めて貰えない悔しさは就活中にもう十分体験した。

重ねて言おう。

俺は就活生だった。

「有難うございます！ 宜しく願いします！！」

そう、大学四年の七月。

そろそろ決まらないうと厳しいというところで何とか俺、サイジヨウ西城 悠ユ斗ウトは東京のとあるソフトウェア会社の内定を貰った。

地元の宮城に就職出来なかったのは残念だが……。今、この瞬間も内定が貰えず頑張って就職活動をしている人達がいるんだ。贅沢は言えない。

といっても宮城で一人暮らしをしてまで工業系の大学に通っていた俺にとっては希望に沿った進路先と言える。

今後について色々期待や不安があるが今は純粹に内定を貰った事が嬉しい。

「皆にも一応報告するか」

一応色々相談に乗って貰ったり心配も掛けたりしたので研究室の同級生や教授、サークルの仲間、交流のある先輩や親戚に次々にメールで報告する。

送った直後にお祝いの返事が次々に届いた。

『おめでとぅー!』

『ちくしょうおおおおお! 先を越された!!!』

『おめでとぅございます!』

『来年は東京か、俺を見つけられるかな?』

『よっしゃ! 飲みに行こう!』

一部おかしいが次々と届くお祝いメールに熱い気持ちが湧き上がるがまだ報告をしていない人物に気付いた。

「そうだ、祖父ちゃんと祖母ちゃんは携帯もパソコンも無いから直接電話で報告しないと」

祖父母は宮城県の北部に住んでいる。

両親や弟に妹も俺の住む仙台に住んでいるが、俺は一人暮らしというものに慣れていたので大学進学と同時に一人暮らしをしている。

その時に同じ町にいるのに態々別々に住む必要はないと、両親と揉めたときに助けてくれたのが祖母だった。お盆や正月に家族と一緒に帰るといまだにお小遣いをくれて頭が上がらない。

最後に会った時も就職活動について心配していたので直接報告して安心させてあげたかった。

早速番号を押し何度かの呼び出し音の後に通話先の受話器を取ったのが分かる。

『もしもし?』

「あ、お祖母ちゃん? 悠斗だけど」

『ユウちゃんかい? どうした?』

「ああ、内定を貰ったから報告をね」

『あらら〜! 良かったね〜!』

「うん、ありがとう」

お祖母ちゃんは田舎訛りのある声でお祝いの言葉をくれた。言葉が弾んでいる事からも心から喜んでくれている事が分かる。自然と自分も嬉しい気持ちになった。

直接報告して正解だったな

「じゃ、詳しい事はお盆に帰った時にでも話すよ」

『あ、ユウちゃんちよつと待って』

そのまま通話を切ろうとするとお祖母ちゃんに止められた。

「ん、どうかした?」

『えーとねえ……、無事内定も貰って来年ユウちゃんは社会人ですよ?』

「まあ、無事卒業出来ればそうなるね」

しかし既に必修以外の卒業に必要な単位は全て取っているため余

り心配する必要はない。この調子だと四年の後期も碌に学校に行かなくても卒業出来るだろう。心底一年から三年まで真面目に勉強していてよかったと思う。

『それでね、今まで黙っていたけどユウちゃんにはね許婚がいるのよ。本当は卒業するまで言わないつもりだったんだけど』

「……ん？ ゴメンもう一回言ってくれる？」

疲れているんだろうか、何かお祖母ちゃんが変な事を言った気がする。

『だからね、ユウちゃんには許婚がいるのよ』

「とうとうボケましたか御婆様」

『まだまだ若い者には負けません。信じられないのは分かるけど詳しい話をしたいから今度の土日こっちに来てくれない？』

うん、お祖母ちゃんは俺のボケも華麗にスル。え？ ていうか

……

「……マジなの？」

『マジもオオマジ』

無理して若者の言葉に合わせるも田舎訛りのイントネーションでおかしな肯定だったがそれがトドメだった。

「うそお!？」

俺にとって内定を貰い、限りなく最高の日になったその日、それは今まで知らなかった許婚の存在を知る日でもあり

俺にとってかけがえのない日々の始まりでもあった。

許嫁

「許婚つていいよな」

「ぶふっ!!」

「ああ？ 丘村の奴は何言ってたんだ？」

祖母から唐突に許婚の存在を教えられた翌日。俺は内定を貰った事を先生や学校に報告するために大学に来ていた。

一通りの報告を済ませて研究室を覗いてみると、友人の丘村と藤田がいるのが見えたので折角だからコーヒーでも淹れて一息していくことにした。

俺の所属する研究室では四年が十人いる。

三年が正式に入って来るのは夏季休業後なので再来月まではこの研究室には四年しかない事になるが、その四年も半数は就活で忙しく、余り顔を出さない。

この研究室の教授はかなり優しい方で、就活が終わるまで新しい課題を出さないのもで全然出席してないからと課題とか単位の心配もしなくて良い。俺も前期はそれにかなり助けられた。

そんな研究室の中で特に親しいのが今、目の前にいる丘村と藤田だ。

大学一年からの付き合いで、ちょっと肥満気味なオタクの丘村と

金髪でヤンキー気味の藤田は普通に生活していたら絶対に友人にはならなかったと断言しても良い。

工業系の大学に通う学生は極端に三つに分類出来て、オタクとヤンキー、そして普通っぽい人が共存している。そのため少々全体の雰囲気が独特だったりする。そんな中で綺麗に三つの各派閥にはまらず仲の良い俺達三人は大学内でもかなり珍しいだろう。

まあそうなった原因というか出来事もあるのだが、今は置いておこう。

問題なのは丘村が今言った発言である。
余りにタイムリーな話題過ぎてコーヒーを嘔き出してしまった。

「良いじゃん。許婚って憧れない？俺は彼女より“嫁”が欲しいんだよ。……出来れば二次元のだと尚良いよね」

「ゲッホー！ゲホゴホー！」

「お前が変なこと言うから西城が咳き込んだぞ」

確かに丘村が言ったことに驚いたのも確かだが、一番驚いたのは昨日の今日で“許婚”という単語を聞いたからだ。

オタクの丘村は偶にこんな話を振って来る事がある。いつもは適当に流すか返すが、今回ばかりはさり気なく丘村の意見を聞いてみたい。

「ゴホッ……。丘村は何でいきなりそんな話を？」

「ん？昨日買ったラノベに許婚設定の女の子が出てきてね、その子がめちゃくちゃ可愛いんだよ」

ラノベ……。設定とか身も蓋もないがそつえば最近小説やドラ

マも観てないし、架空の話でも参考くらいにはなるかもしれない。
ぶっちゃけ非現実的過ぎて昨日の電話は直ぐに切ってしまったが、
現代の許嫁の扱いはどうなっているんだろうか……？

「小説で許嫁って珍しいのか？」

「いいや？ 貴族とか権力者が出てくるファンタジーとか、社交界とか上流階級が舞台の現代物、後は歴史物やコメディだと一般の小説でも珍しくないよ？」

うん、俺の家は別に金持ちでも何でもないし昔からの仕来たりが残る由緒正しき家でもない。先祖が偉い武将だったという話も聞かない。ハッキリ言ってどれも当てはまらない。

唯一、曾祖父がそこそこの資産家だったという話は聞いている。

戦争で亡くなった人達の為に慰霊碑を建てたり、祖父母の住んでいる地域に高速道路を通す為に尽力したとかで曾祖父だけは地元で有名な人だ。

しかしそれも昔の話。そこから許婚の話に繋がる可能性は無いだろう。

正直この問題を一人で考えるのは限界がある。俺の家庭事情を知らない丘村と藤田に話しても困らせるだけとは思うが、ひょっとしたら参考になる意見が聞けるかも知れない。

だがここでも問題がある。

「丘村は現代でも許婚ってあると思うか？」

俺の発言にどれだけ信憑性があるかだ。

この話の流れで「俺、実は許嫁がいるんだー」なんて言っても冗

談にしか聞こえないだろう。

だから質問の返答で判断することにした。流れ次第では打ち明けるタイミングがあるかもしれない。

「ないよ、絶対」

しかし丘村にバッサリと全否定された。当然、打ち明けることなど出来なくなつたと言つていい。まあ普通はこういう反応だろう。と、ここで俺と丘村の話を聞いていた藤田が会話に入つて来た。

「珍しいな、丘村がそこまで断定して否定するなんて。オタクなんだからそういうのは信じたりするところじゃねえの？　なんか根拠でもあんのか？」

「オタクだからつて言うのは納得いかないけど……。まあ時代が違つてのものもあるよ。でもね、小説で取り上げられる許婚が上流階級の話ばかりの様に今の許婚つてどちらかというと政略結婚に近いと思うんだ。そりゃあ日本の何処かには親同士が決めた許婚がいる家庭もあるだろうけど……。それこそ数は少ないじゃないかな。許婚でも結局別の人と結婚することもあるだろうし」

……政略結婚か、それは考えていなかった。でも幾ら考えても俺と許婚になる事で発生するメリットはない気がする。

そういえば許嫁つて“親同士”が決めた相手だったっけ。なんでお祖母ちゃんが俺に教えたんだろう？

これは親父辺りから聞きださないといけないな。

その後も丘村と藤田に色々許婚について話していると流石に丘村も疑問を抱いたのか「そっぴや今日はやけに喰いつきが良いいけど、西城は許婚に興味でもあるの？」と、質問してきた。

丘村にそう聞かれ俺は思案する。これは打ち明けるチャンスなのだろうか？

ここで考えてみよう。

この場で俺に許婚がいるらしいということを事を打ち明けるとどうなるか。

『あははは！ 面白い冗談だね！ 頭大丈夫？』

『この暑さでとうとう頭が逝っちまったか……。もう就活は無いんだ、ゆっくり休め』

……百パーセント信じて貰えないだろう。

だったらとる行動は一つしかない。

「ああ、内定貰って気分が良いから偶には丘村の話も聞いてやらな
いとな」

「ははは、それ内定を貰っていない丘村への嫌味だろ」

結局誤魔化すことにした。

言っても信じて貰えないだろうし、今じゃなくても、その内ちゃんと話せる機会もあるだろう。

土日は許嫁の件でお祖母ちゃんの家へ行かなくてはならないし、今日は早めに帰って休む事にしよう。

藤田の悪のりは予定外だが丘村も特に気にはしてないし、帰るために椅子から腰を浮かせる

と思っていたが丘村の目がキラリと光った。

「ふっ！ 良いだろう、ならば今日は命一杯話を聞いて貰おう！」

「え？」

「ん？」

俺と藤田の動きがピタツと止まった。

嫌な予感しかしない上に丘村はポケットから手帳を出してパラパラと高速でページを捲り何やら確認している。

俺は藤田と目線を合わせて逃げる合図を送ったが、遅かった。

「ではまず、男の娘の素晴らしさについて二時間ほど！..」

「男の.....、娘だと.....！？」

「に、二時間！？」

.....墓穴を掘ったらしい。残念なことにこういうときの丘村は止まらない。

藤田も顔が引きつっている。

結局解放されたのは3時間後で、一息つく為に立ち寄った研究室で余計に疲れる羽目になった。

そして土曜日。

俺は高速道路をバイクで北上していく。

普段は親父が運転する車で通る道をバイクで通るのも変な気分だ。そもそもバイクは藤田とツーリングに行く時しか乗らないのでバイク自体に乗るのが久々だったりもする。しかも何故か俺一人ではない。

「兄貴、着いたな！」

「……ああ、着いてしまった」

丘村から解放され家に帰った後、俺は直ぐに親に電話をして許嫁について聞いてみた。一瞬間を置いた後「ああ、そんな話もあったな」と流され呆然とした。しかも確信に触れる相手の事とか経緯等は一切聞き出せなかった。

一人暮らしをする時はムキになって反対していたのに、何故か許婚の話はアツサリとしている。

……ていうか当人である俺へ説明不足にも程があるだろう。

そして話を聞いていたらしい弟が面白がつて着いて来た。

弟は哲史と言い、俺の一つ下で俺とは違う大学の三年だ。今年から俺が最近終わらせたばかりの就職活動を始める予定だが、俺のよ

うに一人暮らしせず自宅通いのため金銭に余裕があるらしくお気楽にも毎晩遊び回っている。

そんな哲史だが今回の話には興味を持っているみたいだ。多分次の飲み会とかでの話の種にでもするつもりだろう。

「哲史、お前が何を期待しているか分からないけど、俺は許婚の話は断るからな」

「えー！ 何でだよ体無い」

「デメエ……、面白がっているだろう」

「あ、わかる？」

弟は完全に野次馬根性で着いて来たようだ。取り合えず弟の頭を殴ってから家のドアを開ける。

哲史との会話でサラリと言ったが、色々考えてこの件の話は断るという結論に至った。親同士が決めたことだが、結局は本人の意思の問題だろう。相手の人も案外無理やり話を出され嫌々で従っているだけかもしれないし。

そもそも詳しい事を一切話さない両親に不信感があるのも確かだ。なんと俺はまだ相手の名前すら知らないのである。

別に付き合っている彼女がいるわけでもないから許嫁が出来ても困る状況にはならないが、やはり現代社会で許嫁というのは上手くはいかないだろう。

つまりこの話は断るのが最善。まあ既に親同士が了承しているので許嫁という関係や繋がりは変わらないかもしれない、だが相手本人と直接今後の対策なり対応の話をした方が意思の疎通が容易になりお互い後腐れ無くこの話を無かった事に出来るだろう。

俺が今日此処に来た目的はそんなところだ。

「こんにちはー！ 悠斗と哲史です。」

「お邪魔しまーす」

外に見慣れない車が止まっていたので接客中かと思って勝手に中に入ろうかと思ったが直ぐにお祖母ちゃんがやって来た。

「ユウちゃんにサトシちゃんもよくきたねえ。さ、早くお上がり。相手の人も待っているからね」

「……ああ、詳しい話だけと言いつつ本人も来ていると」
「くつくつく、頑張れよ兄貴」

もう一回弟の頭を殴ってから俺は相手の人が待つ部屋へと足を踏み入れた。

何はともあれ、まずは今日お祖母ちゃんに俺の意思を伝えて、後日相手の人を呼んで貰おうとしたが手間が省けたようだ。

さて、情報が一切ない噂の“許嫁”はどんな人物かな。

客室

お祖母ちゃんの家に入るといつもの居間ではなく、曾祖父の代から使われているという今では滅多に使われない客室に通された。と言っても田舎の客室なんてそれ程立派な物じゃない。高そうな絨毯も無ければ立派なソファなんて物も無い普通の畳み張り部屋だ。精々誇れるのは部屋から見える限りない緑の景色と見栄を張って買ったであろう座り心地の良い座布団くらいだと思う。

客室に入ると一人の女性がチヨコンと座っているのが目に入った。恐らく彼女が例の許婚なのだろう。丘村の影響で許婚イコール金持ちだったり、凄い美女とかを想像をしていたが我ながら馬鹿だったと思う。彼女の印象はどちらかと言うと田舎の型にハマっている格好で地味な部類に入る。顔だって俺が言えるような立場じゃないが美人と言う様な感じでは無い。それこそ可もなく不可も無い“普通”と言った顔立ちだ。しかし髪の高さには目を見張った。座っているのに畳に届きそうだと言う事は腰ぐらいまであるのだろう。これは都会と田舎の両方で珍しい部類に入るんじゃないだろうか。

ようやく彼女の情報を幾らか得たが俺にはもう関係ない。相手がどんなに美女だったたり好みの女性だろうが俺は既にこの話は無しにして貰おうと決めているのだ。相手が如何に好みの女性でも俺は一度決めた事を変える気はない。

「ユナちゃん待たせたねえ。今、ユウちゃんを連れて来たからね」

「こんにちは、西城 悠斗といいます」

「こ、こんにちは。えと、三塚 由奈と申します……」
「……」

取り合えず挨拶はしておいた方が良さだろうと思って挨拶したら相手も詰まりながらも挨拶してくれた。ここで初めて許婚の名前が三塚 由奈だと言う事が判明。聞き覚えの無い名前なので丘村から借りた小説の様に昔の知り合いとか幼馴染といったオチは無さそうだ。つまり俺にとっては本気で見ず知らずの他人と言う事になる。

そして哲史が挨拶しないと思ったなら部屋に入って居らず、襖の外に待機していた。だが盗み聞きする気満々である。あの野郎……。

「（兄貴、グットラック！）」

「（失せる）」

哲史はビシッと親指を立てサムズアップするが俺は冷えた視線を飛ばしこの場から失せるように念じる。しかし哲史は気付いていないようで全く効かなかった。後でまた殴ろう。

何はともあれ、俺とお祖母ちゃんも見栄を張った分座り心地の良い座布団に座った。俺と三塚由奈が向かい合い、俺のお祖母ちゃんと相手の付き添いの人に向かい合う。まるでお見合い様だがドラマ等で見たお互いの格好や場所、雰囲気が全然違うためやっぱり違うんだと思った。そして相手の付き添いの人も両親という感じではなく祖母という感じだ。いよいよ怪しくなってきた。

「えーと、俺は今回の経緯について何も聞いていないんだけど、そろそろ教えてくれない？」

「え？ 全く聞いてない？」

「うん」

「アイツさ何考えているんだべ？」

アイツと言うのはたぶん俺の親父だ。俺の説明要求にお祖母ちゃんが首を傾げるがそんなの俺が聞きたい。しかもお祖母ちゃん東北弁に戻っているよ。聞き取りづらくなるから標準語に戻して下さい。そして俺とお祖母ちゃんの話聞いていた相手の御婆さんがその言葉に反応したようだ。

「つまり悠斗君は全然知らなかった？」

「ええ、そうです。三塚由奈さんの名前もたった今知ったくらいですから」

「それは変だねえ。ユウちゃんに許婚の事を教えるのを頼んだのはアイツなのに」

俺が相手の御婆さんに返事をしていると隣のお祖母ちゃんからまた新事実が発覚した。お祖母ちゃんは自分の息子 俺の親父をアイツと呼んでいる。つまり俺が親父に電話で質問を流されたときには親父はお祖母ちゃんに許婚の件で頼みごとをしている筈で、知らない訳がないのに知らなかったかのような反応をしたのだ。

親父の意図が不明である。

「……分かった、その件は親父に直接聞くとして、今日は何をするつもりだったの？」

お祖母ちゃん達は経緯や事情を知っている様なので深く追求すれば聞けるかもしれないが、俺は既にこの件は断ると決めている。経緯や事情を話さなかったあの親父は後でキツチリ問い詰めるとして、さっさと要件を聞いて断るタイミングを計った方が良さだろう。と思っただけ……。

「本人同士の顔合わせとー、今後の打ち合わせとー、結納の話とか？」

「ちょおおおおおおおと待って下さい？」

最初の二つは良いだろう。何も初対面で結婚ということは無いだろうし。しかし最後の結納、これは問題だ。結納と言っても実際何の事が分からない人も多いかもしれないが、結納とは結婚の確約に伴う儀式の一つだ。これを行うと「結婚をします」という約束を正式に交わした事になり婚約者同士となる。そのあとで婚約破棄すると最悪慰謝料も発生する。つまり断るとしたら今じゃないとトン拍子で日程が決まり何も対策が出来なくなってしまう。

「まず本人同士の気持ちは確認しないんですか！？」

「ユウちゃんについては大丈夫だと言われたけど？」

誰に、とは聞かなくても分かった。あの糞親父め……、人の性格を熟知してやがる。確かに俺は別に許婚が出来ようと全然構わない付き合っている彼女でもいれば色々変わるのだろうが、今まで女性と付き合った事も無い。俺は恋愛自体に興味がないのだ。だからと言って結婚したくないと考えている訳ではない。いつかは誰か、と考える時は沢山ある。だから親が勝手に結婚相手を決めたと言われども実は全然抵抗感が無かった。

しかしそれは“今”じゃない。

「仮に俺は良いとしても、三塚さんの気持ちの確認も」

「あ、私は大丈夫ですよ?」

「ほら、三塚さんもこう言って……ってなにiiiiiiiiいいい!」

「あらあら」

「お熱いわねえ」

な、何だ?

何が起こった?

お祖母ちゃんと御婆さんはウフフと気色悪い笑みを浮かべているし、襖の外にいる哲史は期待の眼差しでこっちを見ているのを感じる。

……失敗した。

俺の性格や気持ちがどうであろうとこの話は断るのは既に決めた事だ。遠まわしに三塚由奈に俺が断ろうとしているのを察せさせるつもりだったが、もっと強く直接的に言わないと駄目らしい。

因みに俺はこのとき、三塚由奈の返答に動揺していて、何故相手がそんな返事をしたのかに全く思考が至らなかった。

「お祖母ちゃん」

「ウフフ、どうしたの?」

「俺は来年から東京です」

「そうね」

「ソフトウェア会社です」

「大変そうね」

「給料少ないです」

「甲斐性無し」

う、うるさい！

まあ、と言っても初任給の話だ。実際に働いた事があるわけではないのでその後の給料がどうなるかは知らないけど、一年目はそれ程大きく変わる事は無い筈だ。

「つまりですね、来年は色々あつて結婚はまだ早いと思うんですよ。実際にいきなり聞いた話でしたし、ここは一旦許婚の話しは白紙にしてください」

「うーん、つまりユウちゃんは二人で生活するのが不安つてわけね？」

「は？ だから許婚の話しは」

「なら大学の卒業まであと半年あるわけだし、その間に一緒に住んでみて練習してみたらどうかしら」

さっきから人の話に被せてきやがって……。

そして今、相手の御婆さんはなんと言った？
大学卒業までの半年を一緒に住む？

話しの流れについていけないぞ！

「あらゝ、それは良い考えねゝ」

「でしょう？」

「いやいやいやいや、それは問題があるでしょう？ それに俺の部屋はそんなに広くありません」

三塚由奈の歳は知らないが、俺だって二十一の男である。いろいろな意味で二人暮らしなど出来る筈も無い。

「部屋の広さは実際生活してみて判断すれば良いし、貴方達は許婚なんだから問題なんてないわよ」

東京に行くまで後半年だと言うのに狭かったら引越せと申しますかこの御婆様は。それに許婚だろうと今日初対面の二人が二人暮らしなど問題ない訳が無いだろう。などと思案していると肩をチョンチョンと叩かれた。

「えーと、西城さん？」

「ん？」

ここまでずっと黙っていた三塚由奈が俺にコッソリ話しかけてき

た。

「ああなったら御婆ちゃんは止まりません」

「……どこか友人を思い出すけどそれは同感だよ」

オタク話になると止まらない友人の事を思い出し、げんなりとしながら頷く。そして三塚由奈は驚きの言葉を放つ。

「ここはお祖母ちゃん達の話に乗りましょう」

「ええ！？ な、なんで！？」

「まず、この話し合いを終わらせないと話がドンドン進みます。なら話を合わせて終わらせ、後でお祖母ちゃん達を抜きで今後の対策を練った方が良くありませんか？」

「……確かに」

三塚由奈は発言が少ないため内気な性格と思ったが結構大胆な行動を起こす人のようだ。俺は彼女への見方を改めた。

「西城さんは今日ここに泊るんですね？」

「うん、そのつもりだ」

「では明日の今と同じぐらいの時間にここから北に真直ぐ行つたところにある空き地に来てくれませんか？そこで今後の話し合いをしましょう」

「わかった」

彼女自身が許婚の件についてどう思っているかは分からないが、この場で話し合いをする気はないようだ。俺も変な方向に進む話し合いは終わらせた方が良くと判断したので先程三塚由奈と打ち合わせした通り、お祖母ちゃんの話をした。承した。

その後は先程までが嘘の様にすんなりと話しが終わった。

今後の予定だとか結納だとかが半年の共同生活の件で今話し合わなくてもなくても良いだろうと判断され、思ったより話す内容が無かったからだ。

「では明日お待ちしてますね？」

「ああ」

帰り際に三塚由奈は俺にだけ聞こえるように囁いて御婆さんと車で帰っていった。ふと後ろを振り返ると哲史がいた。

「兄貴やお、どうすんの？」

「わからん」

哲史も心配してくれているのかそんな言葉を掛けて来た。断ろうにも何故か二人暮らしをする事になっているし、その前までは結納の話しまであった。俺が思っているよりこの件に皆本気なのかもしれない。

「俺的にあの子、ちょっと弄れば綺麗になると思っぜ？」

「そういう話かよー！！」

「ぐはっ！？」

そっだ、コイツが俺を心配するなんてあり得ん。

多少いつもより強めに殴って俺は今後の事に頭を悩ませるのだった。

親睦

辺りが夕焼けで紅く染まる時頃、俺はお祖母ちゃんに買い物を頼まれスーパーへ買い物に来ていた。

田舎 地方のスーパーや電機屋、本屋等は消費者が買い易いように密集する傾向にある。スーパーが二件や三件密集しても別に良い事などは無いのに、何故か友人の藤田とツーリングで色々な所へ回っても何処も同じ傾向が見られた。お盆やお正月は人で溢れかえるので余り移動せず物を揃えられるのは助かると言えば助かるのだがそれ以外の日はがらがらだ。

しかも密集する場所が悪い。ここはお祖母ちゃんの家から車やバイクでも三十分掛かる。一応ちゃんと塗装された道路は通っているし一本道なので歩きや自転車でも行けることには行ける。だが途中に恐ろしく急な長い坂道があるため俺も弟も挑戦したことは無い。挑戦すれば俺と弟でも二時間は掛かるんじゃないかと思込んでいる。行ったら行つたで帰りもあるし、そう思うと挑戦する気も起きないと言つもんだ。

「兄貴、こんくらいでいいんじゃないね？」

「だな。……しかし多いな、全部積みめんのか？」

「まあバイク二台なら何とかって感じだな。帰りは下り坂だし、スピードは出さない方が良くと思うけど」

スーパーが気軽に行けない所にある関係上お祖母ちゃん達は余り買い物が出来ない。お祖母ちゃん達は車を持っていないし自転車も漕げない。特に車に関しては年齢的にもう乗らない方が良くと判断して自分から乗るのを辞めた。自分はともかく誰かに迷惑を掛けるかもしれないからだとか。全く、全国の事故を起こす運転者にも見習って欲しいね。

話が逸れたがつまり買い物が出来るときはまとめ買いになってしまい荷物が多くなってしまふのだ。

「早めに冷蔵庫に入れないといけないのは俺が一足先に持って行くから兄貴は電機屋で他の買い物宜しく」

「なんだ？ 殊勝な事言いやがって。悪い物でも食ったか？」

「ええー？ ただ刺身とか痛ませたくないだけなのにそんな反応されんの？」

「あー、はいはい。分かったからさっさと行け」

「ひでえなあー」

要冷蔵の食材を持って一足先にお祖母ちゃんの家に戻る哲史を見送り俺は足早に電機屋へ向かった。

何故足早かと言うと去り際の弟の口元が妙にニヤニヤして気になったからだ。あれは間違いなく何か悪い事を企んでいる。

電機屋に入ると冷房の冷たい風が肌を撫でる。

外の暑さが嘘みたいを感じる店内ではスーパ―と同じく全然客がいなかった。

しかも商品の並びが雑で何処に何があるのかも分からない。

「すいませーん」

「はいはいー」

仕方なく店員さんと呼ぶ事にした。店員さんも暇だったのか直ぐに来てくれた。

明らかに店長みたいな格好の人が来たのは予想外だったが……。年齢的には俺とそう変わらない様な男の人だった。

「これと同じ電球と蛍光灯と電池の場所をお聞きしたいのと……。あと扇風機の配達をお願いしたいのですが」

「少々お待ち下さい」

電球や蛍光灯はお祖母ちゃん達が暮らしている家では生命線とも言える。お祖母ちゃんの家近くには道路灯が無いので切れると本当に真っ暗なのだ。まあ寝るのが早いようなので余り実害は少ないように見えるが食事時などに電灯がチカチカしていると結構つらい。別に家中の電球が切れた訳じゃないので沢山買わなくてもいいかもしれないが、買い溜めしておかないと俺と哲史が帰った後に電灯

が切れた時困るかもしれないと思い余分に買っていく事にした。

扇風機は単純に来客用　この場合は俺と哲史が使う部屋に置いてある扇風機が壊れているのが発覚し買うことにしたのだ。お盆に家族で寝泊まりする時にも使うと思われるので無駄にはならないだろう。

まあ、届くのは明日なので俺と哲史は今回は一回も使わずに帰るのだが。

「では此方にお名前と住所をお願いします。電球と蛍光灯も一緒にお送りしますか？」

「いえ、そつちは持って帰ります。」

店員さんから場所を聞き、会計を済ませた俺は扇風機をお祖母ちゃんの家に届けて貰うためにお祖母ちゃんの家の住所と俺の名前を書いた。

紙を受け取った店員さんは一瞬驚いた表情をして聞いて来た。

「西城悠斗？　ひょっとして“坂向こうの西城さん”の家の人か？」

「……たぶんそうですね」

“坂向こう”というのは例の長い坂を境目としたお祖母ちゃんの家がある側をさしている。更に曾祖父がこの辺では有名だったため

高齢の人に名前を名乗ると偶に似たような反応をされる。

しかし若い人 俺と余り歳が変わらなそうな人にそう言われるのは初めてだ。

「そうか、たしか今日だったっけ……。にしても偶然っていうのは……」

「……？」

店員さんは何やらメモを見ながらブツブツと呟いていた。俺と同じくらいの歳で“坂向こうの西城さん”という名称を知っている店員さんが少し気になったので名札を見てみる事にした。

田舎 地方では偶にあるのだが、自分は知らないのに相手は自分の事を知っているという状況が何度かある。地方での人間関係の繋がりの強さを表しているのかもしれないが、実際話しかけられる方としてはかなり困る。

まず、挨拶したくても相手の名前が分からない。

なのに大学に入った時や成人式等ではお祝いを貰っていたりするので、お礼を言わないといけない。しかし電話で名前も知らない人にお礼を言うのはとても複雑だった。

だからこそ、名前を確認してお祖母ちゃんに知り合いなのか確認しようと思ったのだが……。

「（あれ、三塚……？）」

名札には三塚と書かれていた。

三塚という名字はこの辺で別段珍しくない。だが、ついさっきまで別の“三塚”と会っていた俺に偶然と言うには余りにも不自然だ。だからといって三塚由奈との関連性があるとも言えない。

俺も思考の海にドップリ浸かるかと言うところで店員さんが我に返った。

「……あ！ では明日の昼過ぎぐらいには届くと思いますのでよろしく願います」

「あ、はい。願います……」

俺は何となくだがその店員さんの顔を頭に焼き付けていた。“三塚”という名字が気になったのかもしれない。まあ明日にでも忘れるけど。

用事が済めばもう電機屋に長居する必要もない。俺は来た時と同じくお祖母ちゃんの家に戻るため足早に店を出た。

……店を出るまで背後に視線を感じたのはきつと気のせいだろう。

お祖母ちゃんの家に戻った俺はまず言葉を無くした。

まず、目に入ったのは料理を並べるお祖母ちゃん。

次に哲史とお酒を飲んでいるお祖父ちゃん。

そして

「あの、お邪魔してます……」

三塚由奈がいた。少し気まずそうだ。

まあ明日会う約束をしておいてその日に会ってしまっただからね。俺も少し気まずいよ。

というか何故だ!?

何故さつき帰ったばかりの三塚由奈がいる!?

「兄貴おせえぞ」

「……お前か」

そうだ、多分コイツが元凶。スーパーでニヤニヤしていたのはこの事を画策していたに違いない。殊勝な事を言っていたからといって哲史を先に帰したのは迂闊だった。

「いやあ、お互いの親睦を深めるには食事が一番ってね？ お祖母ちゃんに提案したらトントントン拍子に話が進んじやってさー」

「オマエ、アトデ、ナグル」

「何故にカタコト!？」

事情は分かった。親睦を深めるためと言われたのならお祖母ちゃんやお祖父ちゃんも賛成したのだろう。

俺は内心で溜息を吐き、仕方なしに三塚由奈と向き合う。

「さつきは車で来ていたよね？ 外には車が無かったけど、三塚さんの家からどれくらい掛かるの？」

「……車で三十分くらいですね。来る時は私のお祖母ちゃんに送って貰いました」

おいおい、普通に遠いだろ……。往復一時間だよ？

相手の御婆さん、ウチの馬鹿が無理言って御免なさいい!!
哲史は俺が責任持って殴ります!!

「あれ？ でも確か約束した空き地って此処から5分も掛からない所にあつたような……」

「あつ……」

三塚由奈は一瞬「しまった！」と言う様な顔をした。

……どうやら俺は三塚由奈に車で三十分掛かる距離を移動させようとしていたらしい。しかも二人で対策を考えると書いていた事を考えると、御婆さんに車を運転して貰う訳にはいかないだろう。

三塚由奈が免許を持っていれば話は別だが、もし持っていいたら昼間の話し合いの時の移動で御婆さんに運転させたりはしないだろう。御婆さんも見たところ俺のお祖母ちゃんと同じぐらい高齢だったし、見ていて冷や冷やした。

しかし、となると空き地で話し合うと言うのは見なおした方が良いだろう。

「二人共、早く座りなさいー」

「ああ、そうだね」

「はい」

お祖母ちゃんに言われて俺と三塚由奈は料理の置かれたテーブルの前へ座った。奇しくも俺と三塚由奈が隣合わせになった。お祖母ちゃんの家のテーブルは結構大きいのでぶっちゃけ隣り合って座る必要も無いんだけどね。

でもここでその事を言ったらまるで意識しているように捉えられ

そうなので黙っている。別にならないし。

「兄貴、刺身無くなるぜ」

「あ、テメエ半分以上食ってんじゃねえか!？　　つつかこの盛り合わせ七人前だったのにどんだけ食ってんだ!！」

「俺の家は刺身なんて滅多に出てこないからな、食い溜めしておかないと」

「一人暮らしの俺の方が食べる機会少ないわ!！」

その後は和気あいあいと食事が進んだ。

「ふーん、三塚さんは一八歳なんだ？」

「はい、今年一九になりますけど、進学はせず自宅で家事の手伝いや畑のお世話をしています」

ねりねり。

うん、食事の場だと話が進む。簡単に歳や今の状況を聞き出せた。雰囲気がそうさせるのか三塚由奈も質問を絶やさない。

「西城さんは大学生なんですよ？　どんな事を勉強しているんですか？」

「情報工学かな。　プログラミング言語とかアーキテクチャとか基盤の　」

「????????」

ねるねる。

三塚由奈は理解しようとして一字一句逃さないように聞いていたようだが傍から見ても頭の上にはてなマークが浮かび揚がりそうな程、難しい顔をして首を傾げている。

まあ知らない人に言ってもこんな反応だろう。前に家族全員同じ反応されたので慣れている。

「けっ、理系はこれだから」

「黙れ経済学部。今は手に職があった方が便利なんだよ」

「うあー、就活やりたくねー」

そう言つと哲史は現実逃避のつもりか、次のお酒を取りに居間から台所の方に向かった。

就活に関してはたぶん俺の様子を見ていただけ余計に不安があるのだろ。まあ、相談されたら相手になつてやらない事も無い。

ぐりぐり。

うん、こんなものだろう。

「……ところで、西城さんはさっきから何をやっているんですか？」

「^{ワサビ}山葵と生姜とタバスコとからしとその他もろもろを混ぜた特別醤油」

余りに微量で見た目は変わらない。しかしその中身はえげつない威力を誇る俺の長年の経験が成せる作品だ。

「……何故それを弟さんの醤油と取り換えるのです？」

「え？ 何のこと？」

台所から戻つて来た哲史がそれを使つてどうなったか言うまでも無いだろう。

とりあえず笑いの絶えない食卓だった。

時計の針が九時を回った頃、テーブルの料理は片付けられて皆でお茶を飲んでマツタリしていた。

……何故か哲史は青い顔をして沈んでいたが、オレ、ゼンゼン、シラナイ。

「三塚さん、時間大丈夫？」

「あ、そうですね。そろそろお祖母ちゃんに電話して迎えに来て貰わないと……」

「兄貴、バイクで送ってやれよ……。メットは俺の使って良いから……」

「それは良いねえ。ユウちゃん、是非送ってあげなさい」

「それよりお祖母ちゃん……、胃薬無い？」

案の定三塚由奈は帰りも、車で送って貰うらしい。そこで哲史は死にそうな声で俺に振って来た。

「え？ でも……」

「いや、送っていくよ。道も暗いし、こんな時間に御婆さんに運転させるのも危ないよ」

酷い言いようかもしれないが本当の事だと思う。哲史は俺を上手く嵌めた積りだろうが、俺は始めからその事を見越して哲史とお祖父ちゃんがお酒を飲んでいても付き合わなかったのだ。

それに、結果的に二人になるので明日の約束まで待つ必要も無く今後の対策の話が出来る。

俺は哲史のバイクからヘルメットを取りそれを三塚由奈に渡した。
三塚由奈もそれを戸惑いながらも受け取った。

「丁度良いから明日の件の話を今したいけど……、時間は大丈夫？」

「そうですね……。そんなに長くは無理ですが少しなら。私の家の

手前に広場があるのでそこまでお願いします。」

「分かった。しっかり掴まっけていてね」

「はい」

俺は後ろから手を回してしっかり掴まっているのを確認してからバイクを発進させた。

目的地は三塚家の近くの広場だ。

対策

夜とはいえ季節は七月の中旬、まだまだ蒸し暑い。そんな中、俺と三塚由奈はある広場で向かい合っている。

結局、あの後バイクで二十分近く走った。三塚由奈の家は、例の長くて急な坂道を超えてスーパー密集地域の方向とは別の道の先に在った。車で三十分っていうのはたぶん安全で遅めに走っていたからだろう。

一瞬、何でお祖母ちゃんの家近くの空き地じゃ駄目なのかと思ったらバイクでその近くを通った時に直ぐ分かった。唯でさえ少ない道路灯がその周辺には全く無く、広場は見ていて不安になるほど暗闇に包まれている。

三塚由奈が指定した広場には明かりが適度に灯っており相手の顔を見れるくらいには視界も確保出来る。この広場は集会場の前にあり、夏休みシーズンには余り規模は大きく無いがお祭りも行われる。お祖母ちゃんの家近くの空き地は昔から誰も住んでいなく、近所の子供がボールなどで遊んでいるのが精々だ。道路灯の数の違いはその辺から来ているんじゃないかと思う。

それはともかく、ようやくこの地に来た本来の目的を果たせそうなのだ。成り行きで夕食を食べたりバイクに乗せたりもしたが、俺

の気持ちに変化は無い。許婚の話しの件について気になる点が多いが、それは親父から聞き出せば良い。ここで問題なのは三塚由奈自身の考えだ。

「で、早速昼間の話の件で話をしたいんだけど……、時間も遅いし幾つか簡単に聞くよ?」

「はい」

既に時間も十時に近い。

相手の御婆さんの家には俺が送ると連絡をしているが余り遅くなると心配するだろう。だから気になっている事の中でも今直ぐ聞きたい事を聞くべきだと思う。

「三塚さんは許婚の事を聞いたのはいつ?」

「一年前です。その時ちょっと色々あって……、その時に私のお祖母ちゃんから聞きました」

んん? 今、あからさまに言葉を濁したよな?

その「ちょっと色々あつて」も気にはなるが今は置いておく。時間に限られているし、他に話さないといけない事と聞きたい事は沢山ある。それに、この話が本当なら許婚の話は少なくとも一年前にはあったという事になる。

「今後の対策つて、三塚さんはどう考えている？ このままいくと俺たちは半年間共同生活する事になるんだけど」

「確かに、共同生活は無理があります。私も反対です」

「じゃあ」

「ですが、お祖母ちゃんの悲しむ顔も見たくありません」

「……なんで御婆さんが悲しむの？」

「やっと話が進んだって喜んでいて……、言にくいというか……」

「……俺のお祖母ちゃんも同じようなもんかも」

「西城さんは二十一歳ですよ？ 世間的にはもう“大人”な訳ですから、やろうと思えば力尽くで断る事が出来るんじゃないやありませんか？」

その事については何度か考えた。

幾らなんでも個人の意思を無視して許婚や共同生活を強制される

謂われは無いんじゃないかと。

いっその事、全部嫌だと突っ撥ねればいいのだ。そうすればお祖母ちゃんだってもう何も言わないだろう。

……言うだけなら簡単だけどね。

それを行うとしたら色々な物を失う覚悟をしなければならないだろう。そしてその失った物は簡単には取り戻せない。

「俺の場合は事情が全く分かっていないからね。自分の意見を通した場合、誰に迷惑掛けるか分からなかったんだよ」

例えば、内定の報告をして初めて許婚の話を聞いた時に断っていたらどうなっていたか？

それは今も分からないが、色々な人に迷惑掛けたらどうということは分かる。

「……西城さんのお祖母ちゃん少し考えが似てますね」

その口ぶりから俺のお祖母ちゃんが車に乗らなくなった経緯を知っているようだ。しかし別に俺は似ているといった意識はない。多

少回りを見ることが出来る人は必ず考えることだと思う。

「三塚さんも、成人したとか関係なく無理やりにも断らない所を見ると俺と同じ事を考えてたんじゃないかと思うんだけどね」

「……そうかもしれません」

「三塚さんは許婚についてはどう思っている？ このままでも良いと思っっている？ 正直な意見を聞きたい」

「それは……、西城さんには申し訳ありませんが私はどっちでも良いという感じです。此処に住んでいる限りそういう人との出会いも無いでしょうし、私自身余り顔が良くないと言っか……」

三塚由奈の意見に俺は一応納得した。昼間の様子を見ると許婚に關して心から反対している様にも賛成している様にも見えなかったからだ。

あと、本人が言っている容姿は別に变じゃない。印象は普通というか地味な部類に入るが哲史も少し弄れば綺麗になると言っていた事もあり、案外整っている方かもしれない。哲史は遊び歩いている所為か女性を見る目に関しては良い方なのだ。

さて、となると俺の意見次第となるわけだが、それはもう出ている。面と向かって言うのはかなり勇気があるが、三塚由奈だって俺に正直に言ってくれたんだ。俺も正直に言おうと思う。

「俺は許婚に反対だ。三塚さんがどうって訳じゃなくて……、俺の恋愛観とか話しても仕様がなから省くけど、どんな人が許婚って言われていても断ろうと思ってた。昼間にも言った通り来年は大変そうだから結婚とかそんな余裕なさそうだし」

「そう、ですか」

言った。とうとう言った。

しかし何故だろう？ 俺は人生で告白した事もされたことも無いが、まるで告白された相手を断った様な罪悪感が暴れまわる。

「……となると、やっぱりどうやって穏便にこの話を終わらせるかですよね？ 共同生活の話もありますし……」

「それなんだけど」

お互いの考えている事を確認した事は結果的に回り道にはならなかったと思う。俺達二人に共通しているのは周りの人に迷惑を掛け

ないように話を終わらせる事。

まあ、当人である俺達に迷惑を掛けて何をつて感じたが、それはもう性格なので仕方ないと思う。それに、親父達の意図が分からない内に下手な行動は避けたいのだ。

だから俺は三塚由奈の話を聞いて、一つの方法を思いついていた。

「俺は共同生活をしてると思う」

三塚由奈が驚いた顔をした。当然だ、最初と百八十度意見を変えているんだから。

問題は山積みだが、それもやり方次第だろう。お互いの気持ちに向いていないのなら寧ろこれが一番穏便に済む方法じゃないだろうか。

「半年も一緒に住む事になるんだったら、きっとお互いに合わない事も出てくるんじゃないかな？」

「あつ」

「それに半年は猶予が出来る訳だからその間に別の方法を探せば良い」

そう、お祖母ちゃん達は結婚の前段階の練習として共同生活を提案したのだろうが、これには決定的な穴がある。

何事にも相性という物はある。

俺と三塚由奈と一緒に生活する上で「全く合わない事があつたらこの話を無しにする」と言えば良い。実際に一緒に生活してから言うのだから、合わないと言う説得力もある。

この方法なら二人は合わないと言う事で当たり障りなく話を終わらせられるだろう。

お祖母ちゃん達の考えの裏を突いた形だ。しかも半年と言う時間があるのでその間に別の方法も考えると言う二段構え。ひよつとしたらもつと簡単な方法があるのかもしれないが、親父達の意図を聞いてから判断しても遅くは無いと思う。

「で、でも……」

三塚由奈は決めかねている様だった。何故なのかは大体予想は付くけど。

しかし、もうそろそろ広場に来て三十分になる、もう余り時間がない。

「俺との共同生活が不安でもそれはやり方次第でどうにでも対策が打てるし、もし嫌なら違う案を考えても良いけど」

「ち、違います！ 私は此处をずっと離れた事が無くって、その、不安なんです」

俺の予想とは違った。俺との生活が心配と言われなかったのは少し嬉しいが、その答えに思わず噴き出してしまった。

「ははは、男と一緒に生活するより都会に行く事の方が不安なの？」

「あう……、そうじゃなくて！ いや違わなくて？」

三塚由奈は混乱して慌てふためいたが、本当に俺との生活が不安じゃないのなら説得も簡単だろう。寧ろそっちが不安だったらどうしようかと思った。無理に説得出来無いし。

「ああ、ごめん。でもなら尚更言ってみた方が良いよ。俺の住んでいる所も東京や大阪とかよりは劣るけど東北の中では都会の部類に入ると思っし」

「……」

顎に手を当てて必死に考えている。

「最悪、半年間タダで旅行出来るって割りければ良いよ」

「……分かりました。そこまで言うのなら宜しくお願いします」

「うん、いつから一緒に住むとかはお祖母ちゃん達が勝手に決めそうだけどね。半年間、宜しく」

ある程度話しは終わったと思う。何か重要な事を忘れている気がするけど。

とにかくもう夜も遅いのではやく三塚由奈を家に送る事にした。

「あの、送っていただいてありがとうございます」

「……まあ、もともとは哲史の提案の所為だから気にしないで」

俺は三塚由奈が家に入るのを確認してから広場まで戻りバイクでお祖母ちゃんの家まで戻った。

翌日、俺と哲史はお祖母ちゃんとお祖父ちゃんに挨拶してから高速道路をバイクで南下した。

「兄貴さあ、共同生活でどうしても合わない所があったらこの話は無しに言って言っただって？」

途中のパーキングエリアでコーヒーを飲みながら休憩していると哲史が唐突にそんな事を言ってきた。ていうか哲史が寝ている間にお祖母ちゃんに言った筈なのに……。

「……なんでお前が知っている？」

「まあ良いじゃん。それより大丈夫なのかよ？ 俺的に兄貴と三塚さんはピッタリの様な気がするんだけど」

「そうか……？」

俺と三塚由奈がピッタリと言われても全くピンとこない。

「……ひよつとして兄貴、心の中で三塚さんをフルネームで呼んだりしてない？」

「っ！ お前、エスパー！？」

「いや、兄貴が分かりやすいだけっていうか……、ってマジだったのかよ！？ 呼び方一つでお互いの距離が変わるもんだぜ。今度会ったら名前で呼び合ってみなよ」

「うーん？」

それってどうなんだろ？

俺と三塚由奈の関係はかなり微妙な所だ。半年間一緒に暮らして

許婚の話無しにするつもりなのにお互いの距離を縮めたら本末転倒の様な気がする。

そういえば

“お互いの気持ちに向いていないから”と言って共同生活を逆に利用する事を思いついたが、もし三塚由奈が許婚の話しに前向きな事を言っていたら俺はどうするつもりだったのだろうか……。

考えても答えは出そうに無いので俺は考えるのを止め、コーヒーの空き缶を捨てバイクの方へ歩き出す。

舞台は田舎から都会へ

対策（後書き）

田舎編（１）終了。

今さらですけどこの作品はフィクションであり、小説に出てくる人物・団体と関係ありません。

都会は怖いところ？（１）

お祖母ちゃんの家から帰ってから三日後、俺はまた大学に来ていた。

今まで就活で寧ろ大学に来ている方が珍しかったので、就活が始まる前までの様に大学に来ているのは不思議な感じだ。

とは言っても、夏季休業前で大学もテスト期間中で特にやることもない。

なら何故来たのかと言うと、内定を貰ったからという事で俺の研究室の教授に呼ばれたからだ。

「これ、夏季休業が開けたら西城君にやってもらうテーマだから良く見といてね」

「……多くないっすか？」

「就活と言う事で前期は優しかっただろ？」

「……鬼ですね」

「甘い事には何事も裏が在るもんだよ。また一つ学んだね」

俺に渡されたのは分厚い三冊の本と薄い数冊の学会のレポート束だった。

良く見ると親切に付箋が貼ってあるため全部を読む必要は無さそうだが、パラパラ捲てみると全部英語で書いてあった。

……正直さっぱりわかりません。

俺の分野に限らず大学のレポートと言うのは英語で書かれている事がある。聞いた話だが、学会も英語で発表しろという場合もあるらしい。

「俺の英語の成績って知ってます？」

「情報系は良かったけどね」

って、知ってるのかよ!!

知っていてこの課題って酷いな……。

まあ泣き言を言っても仕方ない。時間はたっぷりあるのでゆっくり読むとしよう。

実際前期はかなり楽をさせて貰った。この教授で無ければ俺はま

だ内定を貰えず苦労していたらう。

「幾つか藤田君と内容が少し被るから、プログラムや数値の確認は二人でやってくれ」

「わかりました。失礼します」

教授の居る部屋から退室し、帰ろうとすると研究室から丁度丘村と藤田が出て来た。

御昼時だし、教授の部屋は研究室の直ぐ隣りなので出くわしてもおかしくない。

「あ？ 西城、来てたのなら顔出せよ」

「そうだよ！ 先週は男の娘についてまだ半分も語って無いのに！」

「……フイ」

「それはともかく、昼飯食いに行かねえか？」

「お、いいね」

折角なので丘村と藤田と一緒に昼ご飯を食べることにした。

就活が始まる前まではいつもの光景だったが、今思うとかなり懐かしい。

俺の大学の食堂は正直余り美味しく無く、料金も割高で量も少ないと生徒からは不評の嵐で、大学前のコンビニやファミレスの方が混雑するくらいだ。

俺達も態々美味しく無い物を食べたいとは思わないので少し遠出して安さと量が売りのファミレスに来た。

「俺はジャンボハンバーグのライスセットで。西城と丘村は？」

「俺もそれにするかな」

「うーん、悩むけど藤田と西城と同じ物で良いや」

このファミレスは大学からも比較的近く、周りを見渡してもチラホラ大学生っぽいのが見られる。

何やら参考書やノートを開いている人達が多い。

「そついや今週からテスト期間だっけ」

「俺達四年はあんまり関係ないけどな」

「とか言って、目の前の丘村は必死に勉強している訳だけど……」

「ぐぬぬぬぬぬ……!!」

「去年、必修を落としたらしい」

「なるほど」

暫く談笑していると注文していた料理が運ばれてきた。丘村も勉強道具を置いて運ばれる料理を食い入るように見つめる。

流石に量が多い。三人共同じものを頼んだので相手の料理が運ばれるのを待つ事無く同時に食べ始める。

「テスト期間中ってことはもうちょっとで夏季休業期間に入るよね」

「大学に入って四年だが、未だに夏休みと夏季休業って何が違うのか分からねえ」

「本質は同じだろ。名称が違っただけで」

「俺達も四年なんだし、最後に皆で何処かに行こうよ」

「お？」

「いいね」

ひよんな事から夏季休業中の話になった。

そう言えば休み中に遊ぶのも久し振りな気がする。

丘村の提案に俺と藤田も乗り気になった。

「何処行く？」

「海行こうよ、海！！」

「……男三人でか？」

海に行きたいと言った丘村に対し藤田の的確な突っ込み。

確かに男三人と言うのも妙な哀愁を誘うが、小太りオタクと見た目ヤンキーと特徴無しの俺の三人というのも目を引く組合せだと思う。

「ていうか丘村、就活大丈夫なの？」

「ぎゃあああああああああ！！」

「西城、それ今は禁句」

「……わ、分かったよ、海でもどこでも行こう」

「さいじょおおおおおおおおお！！」

「お客様、店内ではお静かにお願いします」

「あ、スイマセン」

「御免なさい！」

「……」

丘村が叫んだりするので店員さんに注意された。

結局夏季休業中に海に行く事になった。

結果として海に行くのは男三人ではなく数人増えるのだが……、それはまだ先の話。

会計を済ませて店を出ると藤田が煙草を吸って一服していた。丘村はトイレに行ってファミレスからまだ出てくる気配はない。

ふと、俺の研究テーマが藤田と少し被っているらしい事を教授から聞いたのを思い出した。

「藤田、俺の研究テーマがお前と少し被るらしいんだけど」

「ん、ああ、聞いている。ちよつとした計算の理論値と実行値が合ってるかの確認だけだからそんなに急がねえよ」

「ひょつとしてもう終わっているのか？」

「いや、詰まってる。」

藤田は地元の親族が経営する営業所に内定が決まっっていて俺達の中で一番早く就活を終わらせた。その為教授から渡された研究テーマも一番難しい筈だ。その分成績などは加味されているらしい。

藤田自身はヤンキーな見た目と裏腹に努力家なので多分かなり進んでいるのだろう。

藤田は口に煙草をくわえてから煙を吐いた。

「そのうち気晴らしにバイクで遠出しようかなって思ってる」

「ん？ 何処までだ？」

「北海道。遠いから野宿も視野に入れて寝袋も買ったんだぜ？」

「へえ、本格的だな」

「ああ、海に行った後にでも行ってくる。……にしても丘村の奴遅いな」

「……確かに」

「二人とも何してんの？ 遅いよー？」

「「お前を待っていたんだよー！」」

どういつわけか入り口からではなく全然別の方向から現れた丘村に俺と藤田は突っ込んだ。

その後は大学に戻るといふ藤田と丘村と別れ俺は帰宅した。

それからまた二日が経ち、そろそろ来てもおかしくないと思っていたところに俺の携帯にお祖母ちゃんからの電話が来た。

「もしもし？」

『もしもし、ユウちゃん？』

「ああ、悠斗だよ。それより俺に電話ってことは……」

『明日の昼頃、由奈ちゃんがそっちに行くから迎えに行きなさいね』

「やっぱり」

『遅れちゃ駄目だからね』

「分かっているよ」

一緒に住むとなるからには色々相手にも配慮しないといけないだろう。

俺の住むアパートは2DKの家賃4万円。

幸い狭いが和室と洋室の二部屋が在るので寝るときは別々で良い

だろう。まあテレビとか置いてあるので色々移動する必要があるだろうが、三塚由奈がどっちの部屋が良いかによって変えるつもりなので、今は移動させていない。

『そう言えばアイツから事情は聞いたの？』

「……出張で外国行っているとかで繋がらない。しかも一ヶ月！」

お祖母ちゃんの言うアイツとは俺の親父の事。

お祖母ちゃんの家から帰ってきた時に、さあ取っちめてやると意気込んでいたのに肩すかしをくらった。

しかも帰ってくるのが一ヶ月後とか、どれだけ待たせる気だ！！

都会は怖いところ？（２）

翌日、俺は昼頃と言われたので多少早めの十一時に駅前へ待機していた。

本当は着いたら携帯に連絡して貰うようにして俺はその辺の本屋や喫茶店で時間を潰そうと思っていたのだが、案の定というか、予想通りというか、期待を裏切らず、三塚由奈は携帯を持っていなかった。

しかも何時発進、何時着の新幹線かも聞いてない。

そのため俺は何時に到着するのか分からない新幹線を待つために改札口と睨めっこをするハメになった。

今も新幹線が止まったみたいだがそれ乗っているのかも分からない。

「……暇すぎる」

ふと駅の中を見渡してみるとお土産コーナーや試食コーナーには旅行中と思われる人達が溜まり、スーツを着たサラリーマンや学生

が行き交う。平日の昼間だと言うのに人の流れが途切れる気配は無い。

暫くぼーっと眺めていると後ろからチョンチョンと叩かれた。

「こ、こんにちは」

「あっ……」

振り向くと其処に居たのは三塚由奈だった。

一週間前に会った時と同じく地味な印象を持たせる服装なのは相変わらずだが、決定的に違うのは髪型だ。

あつちに居た時は自然の儘にしていた、腰に届きそうな長髪を下ろした状態に後ろで髪をゴムで縛っている。

女性の髪型について余り詳しくないが、たしかひつつめ髪とか言った気がする。

その為以前会った時と大分印象が変わっていた。

「（哲史が言っていた事は本当だったか……！！）」

髪型一つで大人しそうな印象変わらないが、行動的な一面も持たせつつ年齢より少し幼く見える。見る人次第で可愛いとも綺麗とも

言って差し支えが無いくらいだ。始めに抱いたのが良くも悪くも普通という印象だったので俺は素直に驚いた。

髪型でそれだけ効果が在ると言う事は服装も変えたらどうなるのだろうか……。

「あの、西城さん……？」

三塚由奈が不安そうに小首を傾げたのを見て俺は我に返った。

俺は三塚由奈から荷物を預かりながら慌てて声を掛ける。

「一週間振り、移動は疲れた？」

「いえ、寧ろ楽しくてずっと乗っていたくらいでした」

三塚由奈は楽しそうに新幹線に乗っている時の様子や景色の話を話した。乗り物での移動は俺も結構楽しく感じる方なので気持ちは分かる。就活の為に乗った深夜バスにはもう乗りたいとは思われないが。

「じゃあ荷物はコインロッカーにでも入れて、昼を食べつつその辺を案内するよ。何か必要な物があったらその時について見よう」

「あ、はい」

俺は十一時からスタンバイしているため昼食を食べていないのでお腹が空いていたが、三塚由奈は新幹線の中で食べているかもしれないと思ったが、どうやら三塚由奈も昼は食べていないようだ。

俺は荷物をコインロッカーに預けると、コインロッカーを珍しそうに眺めている三塚由奈を連れて駅を後にした。

駅の外に出ると視界が開けて行き交う人々、車の量が嫌でも目に入る。三塚由奈はその光景すら珍しいのかキョロキョロと周りを見渡している。

「……人、多いですね」

「そうかな？　此処より東京や大阪の方がもっと凄かったけど」

「私の居たとところと比べれば何処も変わりませんよ」

「確かに」

あそこと比べれば此処も十分都会だろう。同じ県内なのに違いが多い。三塚由奈やお祖母ちゃんに住んでいる地域では小学校に行くのにも自転車が必要だし、自転車に乗るのにヘルメットも被る。後は周りの人は大抵知り合いなので誰かと出会えば自然と挨拶や立ち話に発展するように挙げれば切りがない。

三塚由奈も同じ国、同じ県内に住んでいるが少なからずカルチャーショックを受けているのかもしれない。

「何ていうか……、空気も全然違うんですね」

「あっちに比べたら緑も少ないからね。直ぐ慣れると思うけど」

そう言っ て俺は昼を何処で食べるかを考えながら歩きだす。駅地下の飯処は割高なので避け、全国展開しているファーストフード店に入る。

店員さんの零円スマイルを受けながらカウンターでメニューを眺める。

「三塚さんは何が食べたい？」

「えっと、……西城さんにお任せします」

そう言われたので適当に注文して商品を受け取った後、店内で座って食べるため空いている席を探した。

店内を見渡すと丁度空いている席が見つかったのでそこへ座り、俺と三塚由奈は注文したハンバーガーやポテトを置き、食べ始める。

「……こういうお店って修学旅行以来かもしれません」

「マジで!？」

確かにあつちにはファーストフード店は一店も見かけなかったが、修学旅行ってことはそれ以前は一回も食べたことが無いのかもしれない。

薄々気付いていたが、三塚由奈には田舎っ子だけではなく世間知らずな面が在ると言って良い。常識が無い訳ではないので慣れれば問題は無いだろうが、それまでは余り目を離さない方が良さだろう。

「三塚さんはこの後どこに行きたい所ってある？」

「まだ来たばかりで何処に何があるか……」

「そうだね。じゃあ軽く雑貨でも見ようか、共同生活と言っても何が必要か分からないから、必要そうな物があつたら遠慮なく言っ
ね」

「はい」

その後はお祖母ちゃん達の近況を聞いたり、この一週間何していたのかを聞きながらハンバーガーとポテトを食べた。三塚由奈は本当に久し振りに食べたのか少しずつ食べていた。

「さーで、じゃあその辺のデパートにでも行きますか」

「は、はい!」

「……何故そんなにビクビクしながら周りを確認しているのかな?」

ファーストフード店を探している時から気付いていたのだが三塚由奈はビクビクしながら周りを警戒している感じがする。始めは人の多さ等に慣れていないだけかと思ったが、昼食後も続けば流石に気になる。

それを俺に問われた三塚由奈はその理由を言った。

「都会は怖いところだから気を付けろって友達が……」

「友達？」

「高校時代の友達なんですけど、こっちの大学に通っているらしくって。私もこっちに来る事を教えたら『都会は怖いところだから気を付けて』と言われたんです」

まあ考えてみれば同じ県なのだし、三塚由奈にも交友関係というものは有るのだろうから友達がこっちに居てもおかしくはない。

なんとなくその友人とはいずれ会う事になりそうな予感がするが、どうやら三塚由奈のこの過剰な警戒はその友人の忠告の所為らしい。

その友人も初めて来た時に何か苦労したのか、それとも冗談でかかっただけなのか、それは不明だが余り変な偏見を持たれても動き辛いし目立つ。

「その友達に連絡して今日来てもらう？」

「いえ、西城さんがいますし、その友達は確かテストで忙しい筈ですから」

「あー、確かに」

「私も落ち着いたら連絡するつもりです」

その友人がどの大学に通っているかは分からないが、テスト期間というのは大体どの大学も似たような時期に行われる。俺の大学は今日がテスト期間最終日だが、哲史の大学は来週からテスト期間に入る筈だ。

しかし三塚由奈はそんなに周りをキョロキョロ注意して見ていて疲れないのだろうか？

……いや、案外これだけ警戒心を持っていてくれるのなら俺も常に注意して三塚由奈を見ていなくても良いかもしれない。

俺の中で友人の言葉を鵜呑みにして体からピリピリするくらいの警戒心を放つ三塚由奈の評価は“純粋で世間知らず”が不動のモノとなった。

まあ、こつちに居る間に三塚由奈に何かあつたら俺はお祖母ちゃんや御婆さんに顔向けが出来無くなりそうだからある程度の注意は向けなければいけないだろうが、三塚由奈も子供ではないのでそれ程心配する必要はないだろう。

と、考えていると目的の建物が見えて来たので未だ周りを警戒しているであろう三塚由奈がいた方へ振り向く。

「取り合えず今は直ぐそのデパートで雑貨を っていない!？」

振り向いた先には誰も居なかった。というか三塚由奈は携帯を持っていないので逸れたら連絡手段がない。一瞬慌てたが落ち着いて周りを見ると特徴的な長髪の主を発見した。何やら看板を持った男に話しかけられているらしい。

「ねえ、出会いカフェって興味ない？ 女性 half 額なんだけど」

「え？ ええええ！？」

どうやらお店の勧誘らしい。明らかに怪しい雰囲気。店の勧誘なのでサッサと断れば良いのだが、三塚由奈は急に話しかけられたのか、慌ててながら混乱して戸惑っているだけだった。

……やっぱり目は離さないようにした方が良さそう。

都会は怖いところ？（3）

「三塚さん、大丈夫？」

「はい……」

あの後、慌てて駆け寄った俺は三塚由奈を連れてその場から連れ出した。遠くから見えていたので状況は理解していたが、いざ勧誘の人の前に立つと結構気まずいのなんの。

厚かましくも俺にまで勧誘をしてきた男をかわし俺は三塚由奈の手を引いてその場を離れた。

俺はこの手のお店に入った事はないが、この道を通る度に開店セールと宣伝しているのは知っている。どこかの常に閉店セールを唄っている電機屋より性質が悪いのだ。

というか恐ろしいのはこの三塚由奈だ。

一緒に歩いているだけで怪しい宗教勧誘やボランティアの募金に捕まった。この辺に住んでいる俺でも半年に一回在るか無いかという勧誘ラッシュを一日で三回も体験した。

三塚由奈はその手の人間を引き寄せる謎のオーラでも出しているんじゃないかと本気で思ってたくらいだ。そして話しかけられる度に三塚由奈は若干涙目になってる。

「と、取り合えず気を取り直して其処の雑貨屋を見ようよ」

「……はい」

明らかにさつきより元気を無くした三塚由奈を連れて俺は駅前でもかなりの大きさを誇るデパートへ入って行った。

三塚由奈も品物の多さに目が点になっていたが次第に先程のショックから立ち直り元気が出て来たみたいだ。

「西城さん、ところで雑貨って何を見るんですか？」

「えーと、三塚さんが使う茶碗とか箸とか、その他にも何かあったら纏めて買っておきたいなって」

「食器なら態々新しいのを買わなくても私なら大丈夫ですよ？」

「まあ二人になって何が足りなくなるか分からないし、多少余分にあっても大丈夫だから買っておこうよ」

一人暮らしの関係上、偶に同じく一人暮らしの藤田や自宅通いだ

が丘村が遊びに来る。その場で飲み会をしたり、丘村が持ってきたゲームをしたりと目的は色々だが、その時に会場となった家の主が食事や摘みの用意をしなければならぬ為、俺の家にも余分に食器はあるのだが、あくまで宴会用とかで使用するので柄や大きさに統一性がない。

と、いうのは建前で雑な扱いをし過ぎたためヒビや傷が付いている可能性が在るので確認するより新しいのを買った方が早いと思ったのだ。

「好きなものを選びなよ。俺も他に何か必要そうな物を探すから」

「はい！」

なにはともあれ、俺と三塚由奈は今後必要そうな物を購入するのだった。

簡単な買い物を済ませた後、俺達はコインロッカーの在る場所ま

で戻り荷物を回収し、俺の自宅まで移動するため電車に乗った。

「西城さんの家ってどんなところですか？」

「2DKのアパートで家賃4万円。もともと一人暮らしだったから広さは余り期待しないだね。一応狭いけど和室と洋室両方あるよ」

「それも気になりますけど、周りに何が在るのかとかですよ」

三塚由奈がふと言った質問に俺が答えると三塚由奈は笑みを浮かべながら付けくわえた。

「近くに俺の通う大学があるよ。スーパーやレストランとか、生活する分には困らないけど、周りに駅とかが在るわけじゃないから少し交通の便は悪いかな。まあ、そのおかげで家賃が安いんだけど」

「近くに大学が在るんですか！？ 今度行ってみたいです」

「……まあ機会があれば案内するよ」

大学を案内しても良いが、藤田や丘村を始めとした同じ研究室の連中と俺が所属しているサークルの後輩達に三塚由奈を見られたらどんな反応をされるか、想像に難しくない。

大学内での知人遭遇率は実はそれ程高く無いが、タイミングは考えた方が良くかもしれない。

「おっと、次で降りるよ。その後少しバスに乗って歩くけど、三塚さん大丈夫？」

「大丈夫です。これでもあつちでは農家の手伝いもしていましたから」

「……俺より体力在るかもね」

最近体力が落ちているのを感じている俺は静かに、体力を付けようと決意するのだった。

電車が止まり駅の構内から出ると、タクシーが沢山止まっている駐車場やいろんな路線を走るバス停が目に入る。俺は大学方面行きのバス停へ三塚由奈を促し並んだ。

暫くすると大学方面へ向かうバスが来た。

時間帯とテスト期間中という事もあるのか、俺達以外にバスに乗るのは年配のお婆さんやお爺さんが主で、知り合いと出くわすという事は無かった。

停留所を四つ程通過した時にバスを下車し、徒歩で自宅まで向かった。

「あそこに見えるのが西城さんの通っている大学ですか？」

「そうだよ。あ、その角を曲がるとスーパーが在って俺はいつもそこで買い物をしているから一応覚えておいてね」

俺は歩きながら逐一何処に何が在るのかを三塚由奈に教えていた。三塚由奈は携帯電話を持っていないので迷っても連絡出来無い。

そのため慣れない土地で迷子になったりしない様に詳しく説明しなければならぬ。三塚由奈も真剣に周辺の位置関係は聞いていた。ので後で実際に案内をすればこの辺りで迷子になる事は無いと思う。

そんな事を考えている内に自宅に到着した。

「着いたよ、お疲れ」

「此処ですかー」

アパートの隣人は基本的に俺と同じ大学の奴らが多いが別にそんなに交流のある奴じゃないし、そこから藤田や丘村といった知人に三塚由奈のことがばれることは無い。

藤田や丘村にもいずれは話す心算だが、話すタイミングは気を付けないといけない。

常識的に考えて、女性と二人で住むなんて事を言ったらほぼ間違いないく邪推されるだろう。

家に入って荷物を置くと三塚由奈はキョロキョロと家の中を見回している。まあ特に面白い物は無いけど。

丘村が置いて行つた怪しげなゲームと本も、藤田が置いて行つた怪しげなDVDもちやんとダンボールで封印して収納スペースの一番奥へ隠している。これは俺が望んだ訳ではないの二人が勝手に置いて行つた物で、ワザと置いて行くのだ。あんな物を大学に持つていく気にはならず、返す機会を窺っていたが結局そんな機会は無かつたため押入れの奥底に封印する羽目になった。

それ以外は和室にテレビとテーブル、洋室にパソコンや参考書や漫画を入れた本棚と比較的にまともな物しか置いていない。

「三塚さんは和室と洋室どっちが良い？」

「え？」

「いや、流石に寝る時同じ部屋つて拙いでしょ？一応和室と洋室が在るわけだし、それぞれの部屋でつて思つただけど」

「……そうですね。私はどっちでも大丈夫ですよ？」

「そう？じゃあ三塚さんは和室にしよう。畳の方が三塚さんも寝易いだろうし、俺は夜遅くまで課題やレポートをやることもあるからパソコンのある部屋の方が移動する物が少ないからね」

そうと決まれば和室と洋室で寝るスペースを確保出来る様に何を移動するか考えないといけない。

俺は何か移動が必要な物は無いか思案していると三塚由奈は冷蔵庫の中を開けて声を掛けて来た。

「夕飯はどうします?」

「あー、冷蔵庫にあるもので手軽に済ませようか?」

「意外と沢山入ってますけど」

「俺は基本ちゃんと料理する方だからね、課題やレポートの期限が近くなったら適当に済ませるけど」

「えっと、夕飯は私が作っても良いですか?」

「んん?じゃあ、お願いしようかな。疲れているだろうからそんなに手の込んだ物じゃなくて良いからね?」

「はい!」

妙に張り切る三塚由奈に首を傾げつつ俺は和室と洋室に布団を敷けるスペースを作るために和室と洋室に入った。和室と洋室を仕切るのは襖のみで開けばそこそこ広く感じるので普段は開けっぱなしで良いだろう。

和室と洋室を覗いてみると特に移動が必要そうな物は見当たらなかった。

「実際に布団が敷けるかチェックしておこうかな」

と考えてピタッと思考が止まった。

よく考えよう、一人暮らしでも食器などは多少余分に持っていてもおかしくはない。

しかし布団は？

藤田や丘村も泊っていく時は雑魚寝だし、親や哲史に妹も県内の家に居る訳だから様子を見に来ても泊って行く事は無い。

つまりだ、何が言いたいのかというと布団が一組足りないのだ。

季節は夏なので布団が無くても別に問題はない。

しかし俺が布団無しで寝ようとしたら三塚由奈はあの性格だ、自分分は布団じゃなくて良いとか言い出さないだろうか？

そうじゃなくても気を遣わせるのは間違いない。

俺は少しの間考えると携帯を取り出し電話を掛ける。

プルルルルと音が鳴り少し待つと通話相手が電話に出るのが分かる。

『もしもし？藤田だけど、どうした西城？』

俺が電話を掛けたのは藤田だった。

何故藤田なのかというと、それはつい二日前に会話した内容を出していたからだ。

「藤田！！ 何も聞かずに寝袋を貸してくれええええ！！」

『……は？』

そう、ファミレス前での会話で藤田が寝袋を買ったという話を聞いていたため、今日一日だけ貸して貰おうという苦肉の策だ。布団は明日改めて買いに行く。

しかしイキナリだからか、藤田も凄い訝しんでいるのが分かる。

『なあ西城 』

「きゃあああああああああああ！？」

「三塚さん！？」

『 女の声？ 』

藤田が何か言おうとしたところで台所から三塚由奈の悲鳴が聞こえて来た。間の悪い事にそれは電話先の藤田にも聞こえたようだ。

それに関しても気になるが今は三塚由奈の悲鳴の理由が気になる。

三塚由奈は慌てた様子で俺のところに駆け寄って来た。

「さ、さささ西城さん、大変です！！」

「ど、どうしたの？」

「ゴ、ゴゴキ、ゴゴゴキブ 』

凄く慌てて何かを伝えようとしているが、これは深く考えなくても何の事が直ぐに分かった。

「ああ、ゴキブリが出たの？」

「いやあああああああ！？」

「ええー？」

見るとゴキブリが一匹壁を走っていた。この進路だと俺と三塚由奈のいる和室に侵入してくるだろう。

別に俺の部屋がゴキブリの出るほど汚いという訳ではなく、夏場だと何処からか部屋に侵入してくるのも珍しく無い。恐らくアパートの別室がゴキブリ発生源になっているのだと思う。

俺もゴキブリは完全に平気という訳ではないが、寧ろ三塚由奈の怖がり方の方に驚いている。ていうか包丁持ちながらで危ない。

俺はゴキブリから目を離さず静かに携帯を耳に当てる

「もしもし、藤田？」

『何だ？』

「寝袋貸してくれる?」

『……言いたい事はそれだけか?』

うん、どうしよう。

取り合えず携帯を耳に当てながら器用にゴキブリを退治しながら藤田になんて説明しようか考えるのであった。

「都会はやっぱり怖いところですよ!」

「ゴキブリは都会とか関係なく無い?」

共同生活は危険が一杯（１）

ドタバタしつつも何とかゴキブリを退治した俺は寝袋を借りる為に藤田にアパートまで来て貰った。

しかし家に入った瞬間、三塚由奈を見た藤田は口に銜えていた煙草をポロツと落としそうになるし、見た目金髪ヤンキーな藤田を見た三塚由奈は恐怖で凍りついた。

取り合えず立ち話も何なので、硬直している二人に声を掛け、部屋に入りテーブルを囲む状況まで扱ぎ付けた。

「
……」
「
……」
「
……」

はい、沈黙が痛いです。

まあ、なんでなのか大体の想像は付くけどね。ここはどう見ても俺が話を進めるべきだろう。

「藤田、寝袋持ってきてくれた？」

「いやいやいやいや、言うべき事は他に在るだろう!？」

話を進めようと思ったたら藤田に突っ込まれた。

あれ？取り合えず本題からと思ったが違かったのかなと思いつつ、ちゃんと寝袋を貸してくれた藤田。やさしいね。

「この人は何処の誰だよ!? いつ、西城に、そんな関係の女性が出来た!？」

言いながら藤田は視線を三塚由奈に移す。

その瞬間三塚由奈は藤田に視線を合わせない様にサッと顔を逸らした。やはりヤンキー顔の藤田に目を合わせるのは怖いらしい。

藤田の顔は初見だと怖くて見られない人の方が多い。よく見ると俺と丘村を含む三人の中で一番カッコ良いと思うけどね。

一度だけ、すれ違った子供に指を指されて泣かれたのは俺と丘村

の中で藤田を弄る爆笑の鉄板ネタとなっている。

「あー、そっちなー」

「この状況でそれ以外の何処に気になると言っただ！？」

「寝袋を持って来てくれているか、とか？」

「それはもう良いっつーの！　良いよ、好きなだけ貸してやるよ！
！　それより説明しろ！！」

「……藤田、なんか無駄に熱いと言っか、切羽詰まってない？」

何だろう、妙に普段の藤田のキャラからかけ離れ過ぎている様な……。三塚由奈も大声をあげている藤田に驚いているし。

「西城、俺達は丘村を含めて四年……いや三年と半年の付き合いだ。」

「……？　そっちな」

「いいか？　西城、お前はモテない。いいか？　モテないんだ！」

「否定できないが、何故二回言っただ？」

重要な事なのか？　それは重要な事だから二回言っただのか？

しかし俺がモテないと言うのは事実なので反論できない。俺自身が恋愛に興味がなくなったからというのもあるが、学力も運動能力も顔もたいした特徴が無い俺は女性からモテようが無いのだ。積極的に女性にアピールする性格でも無いし。

「生活の中に女つ気が全くないお前が、就活が終わり、夏季休業が始まるというこの時期に家で女性と二人きり……、正直俺はへこんでいる」

「完全に僻みだよな」

まあ、藤田や丘村に彼女が出来たら俺も同じ反応するかもしれない。

現状、俺と三塚由奈はそんな関係では無いので濡れ衣と言うか、邪推されていると言うか、とにかく勘違いされているのは分かった。

「……で、何処で騙して誘拐したんだ？」

「三年と半年の付き合いで最終的な解釈がそれかあああああ!？」

その結論はあんまりだ。

ていうか、さっきから遠回しに俺が三塚由奈と一緒に居るのが意外という反応を通り越してこの世の終わりのような反応をされてい

る気がする。

「まあ冗談はこれくらいにして……っと」

藤田は煙草に火を付け、煙を吐きながらそう言った。

どうやら途中から遊ばれていただけらしい。何処までが冗談で何処までが本気かは分からないけど。

「結局、俺や丘村達の知らない所で上手くやっていたという解釈で良いのか？」

「うーん、改めてちゃんと説明しようとなると難しいな」

「何でだよ？」

何から説明しようか考えていると先程からずっと黙って俺達の会話を聞きながら座っている三塚由奈に気が付いた。

「ああ、三塚さん、コイツは俺と同じ大学で友人の藤田ね」

よくよく考えたらお互いを紹介していない事に気が付いた。三塚由奈も俺の意図に気付いたのか藤田に向かって自分から名乗った。

……まだ藤田の顔に目線を合わせられないみたいだけど。

「三塚由奈です。宜しく願います」

「あ、俺は藤田 亮って言うんだけど……、まあ藤田で覚えてくれ」

「んで、自己紹介が済んだところで藤田は許婚ってどう思う？」

「……はあ？」

お互い名乗ったのが功を奏したのか、若干雰囲気が柔らかくなっ
た気がする。

そのままの勢いで此処最近の出来事を三塚由奈にも協力して貰っ
てなるべく詳しく藤田に説明した。

藤田は終始訝しんだ表情を崩さなかったけど三塚由奈も説明や補
足を入れてくれたりすると少しずつ信用してくれるようになった。

「そして今日が共同生活初日で、さっき布団が一組足りない事に気

付いて今に至る」

「マヌケ」

「うるさい」

最後まで聞いた藤田は短くなった煙草を携帯灰皿に入れて新しい煙草を取り出した。

「……一応最後まで聞いたけど、よくそれで共同生活する事になったよな。そこがビックリだ」

「まあ、半年は猶予が出来るし、親の意図が不明だからな」

「西城の親はともかく、三塚さんの親は？」

「……私の親も今聞くのは無理ですね」

「じゃあ現状維持しか無いな。少なくとも一ヶ月後には聞き出せるんだろうし、それまでは適当に生活するしかない。両親同士で洒落にならない約束事もあるかもしれないし」

「洒落にならない約束事？」

三塚由奈が小首を傾げながら疑問の声をあげる。

藤田は少し考えた後

「金銭関連とか？」

「ええー？ 娘をあげるからお金頂戴ってやつ？ 立派な犯罪だろ、それ」

「それはないです」

「まあ冗談だからな。実際俺達が考えても答えは出ねえ。今のはそんな約束が裏で会ったのかもってだけの推測の話だ」

「うーむ、あの親父がそんな黒い事出来る様な性格とは思えないけど」

その後も推測や憶測の域が出ない話が幾つか出たが、最終的に一ヶ月後に本人に聞くしかないと言う事になった。

一息ついたところで藤田が深い溜息を吐いた。

「俺は西城の惚気話を聞く心算だったんだがなあ……」

「悪かったな、予想と違ってて」

「いや、寧ろ心の底から安心したわ」

「どういう意味だ！」

それはあれか、俺にそういう女性が現れることは絶対に無いと言っているのか？

あり得なくないと思ってしまふ自分が恨めしい。

また煙草が短くなってきたところで藤田は腕時計で時間を確認した。俺と三塚由奈もつられて時間を確認する。

「　　ともう八時か、ちょっと長居し過ぎたかな。そろそろ帰るわ。」

「そうだな、俺もお腹が空いたよ」

「……事情を知っちゃったからな、何か困った事があつたら言ってくれ。出来る範囲で手助けしてやるよ」

「おお、本当か！」

その後、三塚由奈は晩御飯の準備をして俺は藤田を見送るために玄関まで付いて行った。

ドアノブに手を掛けたところで藤田は此方を振り返った。

「しかし、男と女が共同生活って幾ら家族公認でも問題在りだな」

「そうなんだよな！。だから色々対策を　　」

「お前の事だ、二人暮らしでも相手に無理やりって状況は百パーセント無いだろうけど、お前が考えているより女との共同生活は大変だぞ？」

「信用されているのか貶されたのか微妙な気分だけど、心に刻んでおくよ」

「まあ、頑張れ」

藤田は困ったような、同情しているようなどっちつかずの表情を俺に向けたあと帰って行った。

藤田には実家に姉がいた筈なので俺と三塚由奈の共同生活がどうなるのか、在る程度予想が出来ているのかもしれない。

和室の方へ戻ると三塚由奈が料理を丁度並び終えたところだった。

今日買ったばかりの食器に簡単で良いと言ったにも関わらずそこそこの込んだおかずが盛りつけられている。

「あ、西城さん。今並び終わりました」

「うん、ていうかいきなり友人を読んだりして御免。驚いたでしょ？」

「いえ、明日は我が身ですから」

「え？」

「藤田さんのあの様子だと、私の友達にも許婚の件は黙っていた方が良くのかなと」

「そうか、三塚さんにも友達がいたんだっけ」

何より説明に時間が掛かる。

今回は俺の説明というより、三塚由奈がいたから藤田も信じたのだろうが、立場が変わった場合、三塚由奈の友人に俺が説明してどれだけ信じて貰えるのだろうか？

下手したら友達が変な男に騙されているとか判断されるかもしれない。

成り行きで始まった共同生活だが、前途は多難だ。

共同生活は危険が一杯（2）

俺は藤田が帰る際に発した言葉を俺はもつと深く考えるべきだったと直ぐに後悔する事になった。

比較的に言葉も途切れず食事を終えた俺達は特に打ち合わせをするでもなく、三塚由奈は皿洗い、俺は風呂掃除と役割分担した。

三塚由奈は家事手伝いをしていたから癖でやっているのだろうし、俺も一人暮らし……というか昨日までの癖で動いているだけなので別にお互いを気遣っての行動という訳でもないと思う。

「……」

俺は浴槽を洗いながら今後の事を考える。

藤田にはバレてしまったがやはり許婚や共同生活の件は余り話さない方が良さそう。しかし、どうしても話さなければならぬ人

物は現状、二人の候補が挙がる。

俺の部屋に遊びに来たりする丘村には遠からずバレるだろうし、恐らく連絡した事で三塚由奈の友達も三塚由奈がどこに住んでいるか等を気にするだろう。

この二人には寧ろ面倒な事になる前に折を見て此方から話した方が後々変な勘違いもされないと思う。藤田の様子を見ると、三塚由奈と説明すれば丘村は問題無いだろう。

問題は三塚由奈の友人だ。どんな人物か分からないが、時間が在る時に三塚由奈に聞いた方が良いかもしれない。その時は丘村の事も教えておこう。いきなりあつたらあの濃いキャラだ、藤田の時のように凍り付くかもしれない。

それに三塚由奈に藤田の事を教えないで呼んだのは俺の反省点だ、あのヤンキー顔を説明なしに呼んだのは悪かったと思う。

しかし事情を知った藤田の協力が得られるのは大きいと思う。少なくとも丘村への説明はスムーズに進められるだろうし、今後俺と三塚由奈だけでは対応不可能な場面に直面した時、相談が出来る相手がいるだけで全然違う物だ。

考え事をしていると浴槽の掃除が終わった。

「後はお湯を沸かすだけか……」

後は機械のボタンを押せば自動でお湯を張ってくれる。

ボタンを押してお湯が沸くのを待つ為和室に行くと三塚由奈は持ってきた荷物を整理していた。

「持ってきた荷物はそれで全部？ 結構少ないね」

「基本は着替えがあれば何とかありますよ」

三塚由奈が持つて来ていたのは着替えが主で、他には髪留め等の小物、小さい熊のぬいぐるみくらいだった。

「そうけど……、うん、やっぱり服とかも買いに行こう」

「え？」

「だって鞆に入る程度の着替えじゃ足りないでしょ？」

「洗濯すれば」

「雨が降ったりして乾かなかつたら大変だよ？」

「うつ……、でもお金は……」

「お祖母ちゃんから二人暮らして事で臨時支給があったから大丈夫

夫」

「うー」

三塚由奈は服を買うか買わないかで葛藤している様だが、やはり女性として新しい服に魅力が在るのだろう。やっぱり新しい服を買いに行こう、もし男の俺と一緒にだと言うなら三塚由奈の友達に任せても良いかもしれない。

暫くは三塚由奈の荷物整理の様子を見ていたりテレビに目を向けたりして過ごした。

荷物整理を手伝おうかとも思ったがチラツと覗かせた女物の下着が目に入った瞬間止めた。三塚由奈も時折顔を赤くしながらあたふたするので、俺は無理に手伝わずテレビに目を移すしかなかった。

荷物整理が終わりテレビを見ていると風呂場からお湯が沸いたアラームが鳴った。

「お風呂、沸いたみたいだから先に入りなよ」

「あ、はい」

「タオルは洗濯機の横の棚に入っているから」

うん、こうして見ると共同生活というのも案外そんなに大変では無いかもしれない。

許婚とはいえ、あくまで俺と三塚由奈は他人同士なのでかなり気は使うが、ずっとこの調子なら別に半年間一緒に住むとなっても苦にならないかもしれない。

「あがりましたよー」

「ああ、う」

途中から言葉が出なかった。

振り向いた俺は湯上りの女性が放つ色香を三塚由奈に見てしまったからだ。濡れた長い髪をタオルで拭きながら現れた三塚由奈は湯上りの為か顔を火照らせ妙な艶やかさがあり、薄緑色の半袖パジャマを着ていた。

俺は不意に浮かび上がった変な考えを無理やり振り払うと風呂に

入るため風呂場へ向かった。そして着ていた服を脱いで洗濯機に入れようとしたところでハッと気付いた。

既に誰かの服が入ってます、誰のかなんて考えるまでもありません、はい。

「（これは……、拙くね？）」

主に俺の精神面が。

俺の錆ついた何かを刺激する。恋愛歴ゼロの俺には女性の衣服だって精神的にダメージを与えられるのだ。というか三塚由奈も無防備過ぎると思う。

幾ら共同生活をするにしても一週間前までお互い知らない者同士への行動や態度ではない様な気がする。

お湯に浸かりながら俺は今後の共同生活に今さらながら不安を覚えるのだった。

「はあー」

肩まで浸かると思わず溜息がでた。

今思えば藤田はこの俺の状態を予測していたのだろう。実家で姉と暮らしていた藤田だ、女性の生活がある程度知っていて俺と三塚由奈の場合で置き換えてみたに違いない。

藤田の場合は家族なので特に気を使う事も無かっただろうが、俺と三塚由奈の場合は違う。

帰る前の困ったような、同情しているような顔をしていたのはこの事なのだろう。

俺にも妹がいるが、妹は中学生で女性と意識することも無いし、別々に住んでいる為そんな状況にもならない。もっと言うと家族なので何とも思わない。

そう思うと藤田の言いたかった事が若干理解出来た。

女性との共同生活は、大変です。

「よし、寝よう！」

「そうですね」

夜の十時ごろ、風呂から上がった俺は黒いジャージのズボンと白い半そでTシャツを見に包み勢い良く、というか勢いだけでそう言った。風呂に入る前に三塚由奈が小さく欠伸しているのが見えたのと単純に俺も疲れた。

何か色々あった気もするが今日が共同生活初日なのだ。移動等もあつて疲れたに違いない。

その為か三塚由奈も賛成したようだ。

「良いしょつと」

俺は和室のテーブルを台所の方へ持つていく。脇に立て掛けておけば別に邪魔にならないがこうした方が広々と布団を敷けるだろう。

三塚由奈が布団を敷いたのを確認すると俺は藤田から借りた寝袋を手に取り洋室へのドアに手を掛ける。

「じゃ、お休み。その襖は洋室と繋がっているから何かあったら開けて俺を呼んでね」

「何か、ですか？」

「……うん、まあ何かだよ」

またゴキブリが出たら、なんて寝る前に言うべきじゃないだろう。

言葉を濁しながら俺は洋室の方へ入った。

「お休みなさい」

「……お休み」

洋室に入った俺だが別に直ぐ寝る訳でもなくパソコンの電源を入れた。

俺の手元には大学の教授から渡された分厚い参考書とレポートがある、この分厚さでは英語を翻訳するだけで凄い時間が掛かる。そのうえ内容も理解しなければならいと言っるのは夏季休業では時間が足りないかもしれないので早めに動く事にしたのだ。

「（うげえ、酷いなこれは）」

インターネット上では無料英語翻訳サイトというものがある。

これは短文なら割と重宝するが長文となると和訳した日本語がおかしくなったり科学の専門用語や名詞は上手く変換されない事がある。そのため結局は一つ一つ手作業で和訳していかないといけないのだ。

そして今、幾つかの専門用語と思わしき単語で詰まった。スペルで検索すると明らかに科学の専門家が入っているような有料情報サイトに跳んでしまい調べられない。

「（英語の授業、もっとちゃんと受けておけば良かったな）」

改めて分厚い参考書に目を通す。相変わらず英語の羅列で何が書いてあるか分からない。

数式は分かるが何を求める式なのか分からない。

グラフは分かるが何の数値をグラフにしたのか分からない。

先は長かった。

「……………」

不意に目元が痛んだ。長時間パソコンに向かっていると偶に起こる。

目をパソコンから離して時計を見るともう深夜の三時を回りそう

だった。

因みにレポートを作成している時は一睡もしない事もあるため別に遅くまで起きているという事自体に問題は無いが、今日は色々あった為疲れが溜まっている。

パソコンに向かう集中力にも影響するし、今日中に終わらせなければいけない物でも無いので今日はこれくらいにして寝袋を敷き横になる。

隣の和室に居る三塚由奈はもう完全に寝ているだろう。

「（明日は……に布団を買い……行って……大学で藤……と教授……）」

横になって明日やる事を考えているとやはり疲れていたのか直ぐに寝てしまった。

朝七時、睡眠時間四時間と少なめだが目が覚めた。

ああ、寝袋で寝たんだっけとぼんやり考えて二度寝しようかしな
いか考えようとした際、顔を横に向けると眠気が吹っ飛んだ。

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?」

目の前にすやすやと眠る三塚由奈がいた。

共同生活は危険が一杯（3）

今、どういつ訳か目の前に三塚由奈が寝ている。

朝とはいえ季節は夏、若干蒸し暑い所為かお互い汗をかいている。それがまた何とも言えない女性特有の色気を

ってそうじゃないだろ！！

とにかく落ち着いて状況を整理しよう。

一つ、何故か和室で寝ていた筈の三塚由奈が俺の寝ていた洋室に
来ている。

二つ、俺が寝たのは深夜三時頃。

三つ、和室と洋室を仕切る襖が開いている。

……状況を整理して考えても答えは出なかった。

どちらにせよこれは拙い。唯でさえ寝不足の中、朝っぱらから俺

の精神を決るこの状況を何とかしないといけない。

というか起きた瞬間目の前に女性がいましたなんて俺が生きてきた人生の中で一度も無かったので心臓に悪い。

しかし気持ち良さそうに寝ている三塚由奈を起こすのは悪い気がしたので、俺は静かに起き上がり洋室から出た。

「……朝食作るか」

だが俺はご飯とみそ汁と目玉焼きの様な簡単な物しか作らない。料理はするが余り手の込んだ物は作れないし、朝はこれくらい軽い物で十分だからだ。

顔を洗うついでに洗濯機も回し、新聞を取ったりいつもの朝の日課を手早く終わらせる。

そんな事をしている内に三塚由奈が目を覚ました。

目が在った瞬間に慌てた様子で話しかけてきた。

「す、すいません!! 私、ひょっとして寝坊しました!?!」

「いや、まだ七時半くらいだから寝坊って程じゃないけど……、ていうか気になる事はそこなの?」

共同生活をする関係で三塚由奈が家事は自分の仕事だと感じて言ったのなら俺は気にしていない。

そもそも俺は三塚由奈に家事を強要している訳でもないし、そこは分担制で良いと思う。

そんな事より洋室で寝ていた事に関して何も無いのが気になる。

「和室で寝ていたのにどうして洋室に？ 朝起きた時凄く驚いたんだけど」

「……朝早くに目が覚めたので、朝食とかどうしようかと西城さんを起こしに行ったのですが、洋室が涼しくて、気持ち良さそうに寝ている西城さんを見ていたら眠くなっちゃって」

洋室の方が涼しいのは多分俺が冷房を切らずに寝てしまったからだ。

三塚由奈が朝早くに起きたという話は特におかしいとは思わない。俺のお祖母ちゃんが住んでいる地域、まあ直球で言えば田舎だが、そこ住んでいる人の殆どは早起きだから三塚由奈がそうだったとしても別に驚かない。

生活習慣というものは中々抜けない物だから、普段のように今日も早くに起きたのだろう。

それは良い、問題は

「俺の横で寝た意味は？ 一応俺も男なのですが」

「西城さんは安全だと弟さんと御婆さんが言っていましたし」

何故に此处で哲史とお祖母ちゃんが出てくる？

多分三塚由奈と初めて会った日に一緒に食べた夕食、あの時俺がいない間に三塚由奈とお祖母ちゃんが色々吹き込んだのだろう。哲史から吹き込まれたとしたらタイミング的にあの時しか無い。やはりあの時に哲史を帰らせるべきでは無かった。

俺がそんなふざけた事を抜かす哲史へどう復讐するかを考えていると三塚由奈は言葉を続けた。

「あとは、西城さんは兄と同じ雰囲気を出していますから、親しみ易いのもかもしれません」

「んん？ お兄さんがいたんだ？」

「……はい」

よく考えたら俺は三塚由奈の家族構成も知らなかったな。

兄に雰囲気似ているねえ……。少し腑に落ちないところがあるが、三塚由奈が俺に対して無防備な理由の一端が見えた気がした。

しかし三塚由奈の兄に対する話題で何か忘れているような、気付かないような、喉に魚の小骨が刺さっているような些細な違和感があったのだが、気のせいだと思い気にしなかった。

「とにかく朝食を作ったから食べちゃおうよ」

「はい」

そう言っただけで三塚由奈は食事の席に着く。

折角なので家事の役割分担等を話し合った。俺が思っていた通り三塚由奈は家事は全部自分がやるつもりだったようだ。意外そうな顔をされたが特別な事が無い限りは分担通りに家事を行う事に決めた。

洗濯なども対応に結構困るが、お互いの下着以外は特に気にせず纏めて洗うことになった。

「共同生活で決めなきゃいけない事って結構あったね」

「家事は全部私がやっても大丈夫ですよ？」

「それじゃ悪いし、三塚由奈さんも何かやりたい事をやれば良いよ」

「やりたい事？」

「もうちょっとで夏季休業だけど、俺は課題の関係で大学に行かないといけないし、その日は三塚さんも暇でしょ？ 何かない？」

これは共同生活が始まる前から考えていた事だ。

今は夏季休業も近いし、夏季休業中は俺も三塚由奈の相手を出来るが、大学がある日などは一人になってしまう。出来ればやりたい事を見つけて有意義に過ごして貰いたい。

三塚由奈は暫く視線を彷徨わせ、考えたのか思いついた事を口にした。

「バイトがしてみたいです」

「バイト？」

「私が住んでいたところは……その、閉鎖的といか余りそういう場がなかったの」

「……そうだね。働けそうなところを探しておくよ、俺のバイト先に聞いてみるのも良いし」

「え、西城さんもバイトしていたんですか？」

「就活中で休んでいたけど」

取り合えず三塚由奈がやりたい事は分かった。

確かに三塚由奈が住んでいた地域は働くとしたら密集化したスーパーくらいだ。そのスーパーだって通うのに凄い時間が掛かるだろう。

少し変わったバイトを探してあげた方が良くかもしれない。

朝食を食った後はまた課題に取り組んだ

頃合いを見て駅前に行き布団を購入し、バイトの求人雑誌を二冊手に入れた俺はその後、大学の方へ出向いていた。

布団を家に持って帰った際に求人雑誌を一冊三塚由奈に渡しておいた。俺も良いのが無いか探すが、やはり自分が興味を持った仕事が一番だろう。

俺が大学に行く事で三塚由奈は一人になってしまいが、今日は家の周りを散策して過ごすらしい。迷った時は下手に動かず大学を目

印にしてラウンジで待機してくれば迎えに行くとっておいたので多分大丈夫だろう。

そんな事があって俺は今、大学の研究室に居る。理由は二つで、教授に話からなった科学の専門用語を聞くことと藤田に寝袋を返すことだった。

「くっそ、専門用語も載っている辞書が在るのなら始めから貸してくれば良いものを」

「教授は西城を試したみたいだぜ」

「……藤田、どういう事だ？」

「ほら、分からない英単語をいつ聞きに来るかだよ。聞きに来る日が早ければ早い程ちゃんと課題に取り組んでいるってことだろう？」

「なんと！？ 意地が悪いと言つか策士というか……」

「課題を出して一週間も経って無いだろ？ 先生も機嫌良かったぜ、良かったな」

藤田は毎日研究室に来ている関係上、俺や他の研究室に所属している四年より教授と接する時間が多い。その為今の様に教授の意図に気付けるのだろう。

というか最近研究室に藤田と丘村がいるところしか見た事無い。他の連中は何やっているのだろうか。

「で、なんでお前はバイトの求人雑誌を広げているんだ？」

「……ああ」

この場には珍しく丘村がいなく、俺と藤田しかない。俺は今朝の出来事を藤田に話した。

「……バイトねえ、何か良いのはあったのか？」

「いや、パチンコ屋と居酒屋ばかりだな」

現在は就職難でフリーターの道を選ぶ者も少なくない。バイトから正社員に成れる確率は約四割くらいらしいが、それでも就職活動が上手いかない人達はフリーターを選択する人が多いのか、目ぼしい仕事は見つからなかった。

「ま、俺も何か探しておくよ」

「すまんね」

ふと、丘村に三塚由奈の事をどう説明しようかと相談しようかと思った。

藤田の件が在るので俺と三塚由奈が二人で説明すれば変な誤解無く信じてくれるかもしれないが、藤田の協力があればもっとスムーズに行くだろうからだ。

「藤田、丘村にも近いうちに昨日の件を説明したいんだけど協力してくれない？」

「それは良いんだけどよ……」

了承しつつも丘村の名前を出した瞬間、藤田は難しい顔をした。

俺はそれが気になったのでバイトの求人雑誌を閉じて藤田の方へ向きあった。

「……？ 何か問題があるのか？」

「……あると言えばあるな」

尚も言い淀む藤田だがやがて観念したのか、難しい顔をしている理由を口にした。

「丘村が行方不明になってる。判明したのは昨日、お前と別れた後だけだな」

「えっ……？」

丘村が行方不明？ 何でだ？

俺が疑問に思っていると藤田は詳しい事情を話してくれた。

「丘村の奴、まだ内定貰っていなかっただろ？ お前と昼食した後にな、研究室のパソコンで会社選考の結果を確認したら……」

「……落ちてたのか？」

「一度に五社の結果が来てな。全部駄目だった」

そう言われると俺も心配になって来た。

就職難の中、いろんな人がいる。

すんなりと内定を決める者、希望とは違いつつも妥協する者、諦めない者、そして……諦める者、絶望する者。

特に後ろの二つは厄介だ。立ち直れば良いが、そうでなければこの時世、悪い考えが俺と藤田の頭に過る。

「流石に丘村もショックだったんだろうな」

「……」

「事情を知っているのは俺を含めて三人だ」

「俺を入れて四人か……、少ないな」

「まだ何かあったと決めつけるには早いし……、取り合えず詳しい話をしたいから場所を移そうぜ。流石に此処で二人きりで話すのは気が滅入りそうなんだな」

そう言つと藤田は研究室の外に出ることを促す。

俺は静かに頷いた。

混迷のお祭り（１）

研究室から出た俺は丘村について詳しい話を聞く為に場所を食堂に移した。

話しの内容が内容なだけに食堂で話して良いのかと疑問に思ったが、昼時から少し経っているのと、美味しくないと評判が在る所為か席はがらに空いていた。

これくらいの人量だと別に誰かに聞かれる事も無いだろう。寧ろ藤田の顔にビビって誰も近付いて来ない。

「さて、まずは何から話すべきだ？」

「一応聞くけど、行方不明って病気や怪我でって訳じゃないんだよね？」

食堂の空いている席に座った俺達は早速話を始めた。

実は大学生の行方不明や音信普通というのは割と良く聞く話で、

大体が病気や怪我が原因で入院する等で携帯も繋がらない状況なだけだったりする。

大学側には休みの理由が伝わっている場合があるが、小中高のようにホームルームが無い大学では他の学生に休みの理由が伝えられる事も無い。そこから発生する誤解も珍しくは無いのだ。

まずはその事についての確認を込めての質問した。

「それは県外から来て一人暮らしをしている奴に多い事だろ？ 丘村は県内出身で自宅通いだから当てはまらねえよ。……て言うか、俺に丘村の親から電話があったから少なくとも自宅に居ないのは本当だと思う」

「えっ……？ 丘村の親から電話があったのか？ 何で？」

「……それについてはやっぱりファミレスで昼を食った日の事を話さねえとな」

藤田は静かにあの日あった事を語りだした。

「さっきも言っただけどよ、あの日、丘村は研究室のパソコンで会社選考の結果を確認していたんだよ」

会社選考の結果。内定を貰った俺でもその言葉を聞くと胃が痛くなる。

そもそも会社の選考結果がメールで返ってくるのは殆どの確率で落ちている。大抵は受かっていれば書面で結果が送られてくるが、もちろん合格の結果がメールで届く会社も在り、不合格通知も書面で届く場合も在り、それは会社ごとに違うので一概には言えない。

「そうしたら五社からの結果が返ってきていてな、丘村も開く勇気が無かったんだろうな。その場に居た俺と青木と森野さんも巻き込んで全員でメール開く手伝いをしてやったんだよ」

青木と森野というのは俺達と同じ研究室の四年だ。青木は丘村と同じ高校出身とかで丘村と一番親しかった。そして森野というのは理系大学ではかなり珍しく、女性だ。そして俺達の研究室で唯一の女性でも在る。

「青木は兎も角、森野まで手伝ったのか？」

「……丘村が騒ぐから煩かったんだろうな」

丘村がメールの確認で騒ぐのも就活を終えたばかりの俺には頷ける話だ。正直、会社選考の結果確認は怖い。

この時期まで決まらなかったのだ、今までに何回同じ結果の文面を見て来たか分かったものじゃない。俺でも就活中に二通同時に結果が来た時が在り、その時は両方とも落ちているのを見てかなり気持ち落ちた。

その事を考えると五通同時に来た丘村の不安も察する事が出来た。きつと一通一通の確認は気持ちが擦り切れるような思いだったに違いない。

「まあ、俺も青木も森野さんも五通もあればどれか一つくらいは受かっているだろうと思っていたんだけどな……」

「……無かつたんだよな？」

「ああ、それで流石に丘村になんて言って良いか分からなくなっ
つて言っちゃったんだよ」

『運が悪かっただけさ、次を頑張ろうぜ』

『しゃきつとしなよ、気持ちを入れ替えないとまた落ちるよ？』

『こんな事もあるって！ あんまり気にすんな！』

それは皆の気遣いだった。普段、丘村と話しをしない女性の森野まで声を掛けると言う事はその時の丘村は相当酷い状態だったのだ。

しかし三人の言葉は丘村に届かなかった。

『ふざけるな!!』

『!?!』

『!』

『お、丘村氏?』

三人は驚いたのだろう。丘村が怒鳴る事なんて今まで無かった藤田も俺も、恐らく高校が同じだった青木も見た事が無い。俺も話を聞いただけではあの丘村が怒鳴ったなんて俄かには信じられない。

しかし、丘村の気持ちが少し理解出来る俺には三人のタイミングと何処の言葉が悪かったか理解していた。

「“とつくに頑張っている”、“気持なんて簡単に切り替えられるか”、“こんな事があつたら気にするに決まっているだろ”。……丘村が言つた事はそんなところか?」

「……凄いな西城、殆ど丘村が言つた言葉そのものだ」

「就職活動をやっていれば誰だつて一度は思う感情だと思うからね」

就職活動が上手く言っていない人は軽い鬱病に掛かっていると言われている。そんな中で中途半端な励ましは本人を追いつめる結果にしかならない。

無論励まそうとした三人にも全く非はない。丘村がそんな反応をするなんて予想出来なかっただろう。

藤田は俺の言葉を聞いた後、自嘲気に呟いた。

「……俺はそんな事も分からなかった。だから丘村にも言われたよ」

「……何をだ？」

『親族のコネ内定の藤田には俺の気持ちがかかるか!!』

「　　っ!!!？」

流石にその丘村の言葉には俺も目を見開き息を呑んだ。

「いや、分かっているんだ。俺の家も色々事情が在るんだけどよ、他の誰よりも早く就活を終わらせたのは事実だろ？ 内定の報告をした時、何人が面白くなさそうな顔をしていたのには気が付いていた」

「藤田、丘村が言った事は……」

「たぶん本心じゃない、って信じたいけどな」

気持ちが沈んでいる時に思っても無い事を言ってしまう事は普段から良くあることだ。

それに、藤田は俺や丘村、他の研究室の四年の就活のサポートも積極に行ってくれた。それを知っている丘村が本気でそんな事を言っただとは思えなかった。

「俺も様子が気になったからさ、その日の夜に丘村に電話したんだよ、……出なかったけどな。俺も少し気持ちの整理をする時間が在った方が良くと思ってそれ以上電話しなかったんだ」

「そうしたら昨日、俺と別れた後に丘村の親から電話が在った？」

「そうだ。西城の部屋から出て直ぐだな。丘村の携帯から電話が来て、出たら母親だった」

此処まで聞くと大体の状況が理解出来た。

しかし一つだけ分からない事がある。

「なんでお前に電話が来るんだ？」

「携帯が置いてあつて、丘村の携帯に最後の電話をしたのが俺だったみたいでリダイヤルで掛けて来たらしい。話を聞くと家でもちよつと揉めたらしくてな。家を飛び出したって」

「携帯を家に置いて行つたのか……。じゃあ俺にもそのうち電話が掛かつてくるのかな？」

自分の子供の行方が分からなくなつたらその知人全員に連絡をして確認をするだろう。でも俺の携帯にはそんな着信はない。

「いや、俺が西城悠斗の家にはいませんでしたって言つといた。お前は三塚さんの問題で手が一杯の様だしな。本来なら西城には知らせず、俺と青木と森野さんの三人で片付ける心算だった」

「……確かに俺は今色々大変だけど、友人が困っている時に何も知らないで過ごす方が嫌だ！」

「……そうだな、お前はそういう奴だった。でも、なるべくお前は三塚さんの事だけを考えている。丘村の事は見かけたら俺に連絡する程度で良い」

それでも藤田は強情に手伝う事を拒んだ。何を考えているのか分からないが、そこまで強く言つのなら藤田にも何か考えが在るのだろう。

丘村を個人的に探すくらいなら俺一人でも出来る。見かけたらまずは自分で声を掛けて様子を見ようと思った。

「……分かった。何かあったら俺にも連絡してくれ。今日はもう帰るよ」

「そうだな、俺も研究室に帰るわ」

「……って藤田は丘村を探しに行かないのかよ!？」

「西城、丘村が言った言葉を忘れたのか？俺が見つけても丘村が嫌がるのは目に見えているからな、それは青木と森野さんに任せて俺は連絡係」

「なるほど」

俺は藤田と別れた後、念のためラウンジに顔を出した。三塚由奈が迷ったら此処に来るように言っておいたのでもし居たら連れて行くことと思ったからだ。

しかし三塚由奈は居なかった、多分迷わずに散策出来たのだろう。

「あれ、西城先輩じゃないですか？」

「ホントだ！」

「今日はどうしたんですか!？」

「うおっ!？ 何故取り囲む!？」

学生ラウンジをキョロキョロ見ていたらサークルの後輩に見つかり囲まれた。

俺は天文部に所属し部長もしていた。就職活動が忙しく最近は全く顔を出していなかったため、後輩達は俺が現れた事に驚いたらしい。

理系で女性に珍しいのに我が天文部は女性部員を何人が獲得している。今俺を取り囲んでいる三人も女子だ。

確か三年の小井川さんと一年の飯澤さんと花崎さんだった筈、全く顔を出さなかったのでもう名前がうる覚えだ。

「と、取り合えず今急いでいるからどいてくれない？」

「えー？ じゃ、今度サークルに顔を出してくださいよ？」

「そーだそーだ、サボんなー」

「いやいや、俺は今まで就活で忙しかった訳でしてね？」

「終わったじゃないですか」

「……ソウダネ」

ある程度やり取りをすると彼女達も用事が在るのか直ぐに去って行った

俺はしっかりと次のサークル活動に来る事を約束され、グツタリしていた。本来四年は自由参加なのだが、女子のあのパワーに負けて就活中も度々呼び出されていた。

俺は溜息を吐くと帰る為に足を進めた。

家に帰ると三塚由奈が居た。どうやら本当に道に迷わずに済んだらしい。

「あ、西城さん、お帰りなさい！」

「……ただいま」

自分の家なのに自分の家じゃないような妙な感覚を感じながらも
お帰りと言って貰えるのって良いなと素直に思うのだった。

昏迷のお祭り(2)

あの藤田とのやり取りから数日が経った。

依然として丘村は見つかっていない。丘村の親も事情が事情なだけに警察に連絡したりはしてないみたいだがこの調子だと時間の問題だと思う。

俺も人通りが多い所等ではよく周りを注意して丘村が居ないかを探していたが、余り効果は無かった。

「西城さん、どうかしました？ 最近ずっと元気無いですけど……。疲れているのなら買い物くらい私一人で行ってきますよ？」

「御免。ちょっと考え事をね。大丈夫だからサッサと買い物を済ませちゃおう」

丘村の事は三塚由奈に話していない。

余計な心配を掛けたくないと言うのもあるが、見ず知らずの人間が行方不明になったと言っても三塚由奈が反応に困るだけだし、この手の話題はそう沢山の人に話すべきじゃないと思う。

そして数日という時間は俺と三塚由奈の共同生活もそれなりに慣れるには十分な時間だった。

俺の精神面へのダメージはまだまだ慣れないが、当番制にした家事はスムーズにこなせるようになったし、朝の三塚由奈は本当に寝相が悪いと言う事も分かった。同時に三塚由奈に俺が毎日夜遅くまで課題をやっている事にも気付かれた。

丘村の事は気になるが、どういわけか課題は数日前までが嘘のように集中して取り組めた。お陰で今も少し寝不足だ。

三塚由奈はそれを気遣ってくれている様だが丘村が何処に居るか分からない関係上、外出する機会は多い方が良く。それにまだ三塚由奈もこの辺に慣れていないので此処最近は買い物に二人で行くようになっていた。

家から直ぐなので十分と掛からずスーパーへ着いた。途中、俺と同じ大学に通う学生らしき人物と何度かすれ違うが丘村の姿は無かった。

「今日は何買うの?」

「……西城さんは何か食べたい物つてあります?」

「三塚さんが作るものなら何でも食べるよ」

「じゃあ最近暑いですし、冷や奴と……」

手の込んだ物を作れない俺とは違い、家事手伝いをしていた三塚由奈の料理は一人暮らしでインスタント食品と男料理に慣れた俺に

食事の楽しみを思い出させてくれた偉大な物だった。

今日は三塚由奈が作る日なので俺も内心では期待していた。

まあ、御陰で俺も下手な物を作れないと料理当番の時は戦々恐々なのだが。

「じゃあ、西城さんは豆腐を見てきてくれますか？ 私はお肉見てくるので」

「分かった、終わったらそっちに行けば良い？」

「はい、お願いします」

そう言つと三塚由奈は精肉コーナーへ足を向けた。俺も豆腐を見に行こうと顔を向けると、ジーンとこっちを見る人物がいる事に気が付いた。

「……」

「……森野？」

俺、藤田、丘村と同じ研究室に所属する唯一女性で四年、森野だった。

不思議な事に若干顔を青ざめ、目を見開き口も半開きでこの世の物とは思えない物を見た、そんな表情をしていた。

藤田と丘村とは違い俺だけは森野とサークル関係で研究室が同じになる前から交流が在ったのと、コイツの本性を知っている為、俺は森野に容赦がない

「なんだ、その俺を崇める様な眼は？」

「何でそうなるのよ！！ 単純に驚いていたのよ、アンタ今誰と一緒に居たのよ？」

「お前には関係ない。それより丘村の件はお前も関わっているんだろ？ どうなっているんだよ」

三塚由奈と一緒に居る事を見られていたのは予想の範囲内だ。実際このスーパ―には大学の知り合いも利用するし、実際此処数日で顔見知り程度の奴とならずれ違ってもいる。

しかし藤田や丘村のような学外でも付き合いのある奴にばれなければそれ程影響はない。俺とある程度交流の在る者なら目の前の森野と同じ反応をするかもしれないが、総じて俺の大学の連中は誰が誰と一緒に居ようが基本気にしない方だ。

それより森野は丘村の件の当事者の一人だ。話題逸らしと同時に今どんな状況か気になるので聞いてみた。

「ふん、上手く話題を逸らした心算？ 残念だけど、私はそれに関わっていないわ」

「は？ なんで？」

藤田は青木と森野の三人で丘村の件を片付けるつもりだと言っていた。

食い違ふ意見に俺は混乱するが森野は尚も続ける。

「そもそも何で私が丘村を探すのに協力しないといけないのかしら？ 私流石に一度に五社も不合格なのは可哀想だと思ったから励ましてあげたのに、丘村が勝手に逆切れしたのよ？」

「……それはそうだが、森野だって就活を経験しているんだから丘村の気持ちもわかるだろ？」

「そうよ、だから励まそうと思ったわ。けどその後のアイツの行動に付き合う義理は無いの」

「……」

俺は何も言い返せなかった。

本来余り親しく無い森野に丘村を探す事を強制する権利は俺に無いし、森野の言った事にも一理あると思ってしまったからだ。森野は女王様気質というか自己中心的な所が在るのだが、言っている事

は的を射ている。

だから性質が悪いとも思う。

「思った事を行動に出来るのは羨ましいけど、丘村の事情だって理解しているわけだし、少くくは協力しても良いんじゃないか？」

「……そうね、丘村を見かけたら西城に連絡するわ。これで良いかしら？」

「何故に俺？ 藤田や青木は？」

「私が連絡先を知っているのはアンタだけよ」

「さいですか」

まあ、見かけたら連絡すると言ってくれているのだし、全く手伝ってくれないよりは助かるだろう。しかしまともに探しているのがこれで実質青木一人というのは凄い心許ない。

森野は丘村の話はこれで終わりとはかりに話題を戻してきた。

「で、さっき女性は誰なわけ？」

「しつこいな、誰でも良いだろ？」

「良くないから聞いているのだけど」

「はあ？ 何で？」

「……まあ良いわ、次に会った時にちゃんと聞くから。私もサッサと買い物を済ませないといけないしね」

「その買い物籠、インスタントばかりだな」

「うるさい！！」

森野も確かこの付近で一人暮らしをしている筈だ。女性専用のアパートとかで天文部の女性部員連中も何人かそこに住んでいたと記憶している。

というか森野も俺と同じ天文部だったりする。

三年の小井川さんも一年の飯澤さんと花崎さんも、同じアパート繋がりだ。森野が誘って入部させたのだ。天文部が他の部活やサークルと違い女性部員の獲得に成功しているのはそんな背景が在る。

俺も豆腐を持って三塚由奈の所に行こうとすると、森野はレジに向かおうとした足を止め、此方を向かずに言葉を発した。

「西城、丘村がブログをやっていた事は知っている？」

「ああ、オタク向けの情報サイトを作ったってかなり前に研究室で言ってたっけ」

「……そのサイト、一昨日更新されていたのよ」

「……！！」

「少なくともネット環境が在る場所に居て、丘村自身が無事なのは確かだね」

「……そっか、教えてくれてありがとな」

「ふん、私が知っているのはそんなくらいよ」

そう言うつと森野はレジの方へ歩いて行った。口ではああ言っていたけど、森野も色々やってくれたのだらう。俺は心の中で森野に感謝しつつその情報を藤田と青木に送った。

そして少し遅くなったが豆腐を持って三塚由奈のいる精肉コーナーへ向かった。

精肉コーナーへ行くと特徴的な長髪の女性が直ぐに見つかった。しかし何やらぼんやりと眺めている。

「……」

「三塚さん？」

「あ、西城さん」

「花火大会のチラシを見ていたの？」

そう、三塚由奈が見ていたのは花火大会のチラシだった。ここ等辺では毎年行われている行事で、花火は駅前でも見れる為この時期に連動して駅前でも沢山のイベントが行われる。

そのため人通りが非常に多くなる日でもある。

俺は過去に家族と行った事が在り、その人の多さで気分が悪くなつたのでそれ以来行っていないかった。

しかし三塚由奈は一度も行った事が無いので興味が在るのだろう。三塚由奈が住んでいる場所から気軽に見に来れる程近く無い。県内で行われる花火大会でも割と規模の大きい物だし、俺も来年東京へ行くので最後に見ておくのも良いかもしれない。

「行こうか？ 花火大会」

「え、良いんですか？」

「ついでだから花火大会当日の昼頃に駅前へ行つて前に言っていた服を買いに行こうよ。携帯とかも買った方が良くかもしれないし。後は時間までぶらぶらして七時開始の花火を見て帰って来るってのはどう？」

「それは良いんですけどやっぱり服は……、うーん」

また服で葛藤している。

女性の服って何処で売っているのか分からないけど、やっぱり調べて行った方が良いのだろうか。取り合えず俺は当日多めにお金を持って行った方が良くかなと考えるのだった。

それに三塚由奈には言えないが、当日丘村を見かける事もあるかもしれない。

いなかったらいなかったで三塚由奈を案内しながら花火大会や駅前のお祭りを楽しめばいい。

「ところで花火大会っていつだっけ？」

「明日です」

「明日!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2832n/>

俺と許嫁

2010年10月20日08時07分発行